

---

# オーガゲートキーパーズ CASE 2 RACING

ダークボーイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーガゲートキーパーズ CASE 2 RACING

### 【Nコード】

N0254B

### 【作者名】

ダークボーイ

### 【あらすじ】

超高速で暴走する幽霊バイクの陰に見える、友の面影……真実を求め、エクソシストはスロットルを握る！サイバーオカルトアクション、第二段連載！

## S t a m p e d e r

『来るぞ、また速度が上がった』

『接触予定時間修正、ポイントD接触まであと27秒』

『一瞬なんてモンじゃないわ、気をつけて!』

冬の色が濃くなってきた空の下で、一つの作戦が実行されていた。かつての高速道路を改修し、無数の監視・規制システムで完全な管制を施す代わりに、速度規制の上限が引き上げられているスーパーハイウェイに、最高速度を遥かに超える“何か”が走っていた。

『目標の現在速度は時速600km、マッハ0.5に相当します』

『マッハ0.5!? 戦闘機でも走ってんすか!?』

『クライスラーのダッジ・トマホークとほぼ同速度だ。もともと、狭い日本で出す速度じゃないがな』

システム不備の調整 という名目で封鎖されているスーパーハイウェイの閉鎖区間に設置された無数のトラップを、常識外れの速度を出しているそれは次々と突破していく。

『ポイントDのトラップが突破されました。ポイントE到達まで18秒』

『行くぞ、準備はいいか?』

『OK!』

『了解』

ポイントEに指定された場所には、二人の人影があった。

一人は、深い藍色のジャケットを着込み、腰の後ろに一振りの日本刀を指している20にまだ届いてないであろう若い青年、もう一

人は青年より僅かに年上、日本人の平均よりもやや背が高く、蒼く輝く右目を持った鋭い瞳の男だった。

二人の上を滑空していた、一羽の大鷲が甲高く鳴いた。

『あと10秒』

通信機からサポートAI『LINA』からの報告が届く。

それを聞いた二人は、腰を落として腰の刀に手を掛けた居合の構えを、腰のホルスターからワイヤーの両端に大きさの違う二つの四角錐を組み合わせた形の刃の付いた武器 双縄標フタツツバという名の古代中国の武器 を抜いて 接触 に備える。

冬場の冷たさと、抜き身の刃のような張り詰めた空気が相まって両者を内包したまま、空間は凍りついたが如く動かない。

そこへ、両者の前方遠くから、音が近づいてきた。

誰もが聞いた事がある、旧式の燃料式内燃機関の立てる爆音。それが、とてつもない速さで二人へと近付いてきていた。

「ふうー……」

居合の構えを取った青年が、息をゆっくりと一つ吐き、前方を鋭く見つめる。

双縄&amp;#37858;を構えた男が、無言で腰のパウチから呪文の書かれた四角い紙切れ 道教で使われる呪符と呼ばれる物 を取り出し、双縄標の刃に突き刺す。

点にしか見えなかった音源が、瞬く間に近付いてくる、それが何か認識できた時には、それはもう目前だった。

それは、一台の黒い大型バイクだった。

フロントを始め、空気抵抗を極限にまで押さえる一切の無駄の無いカウルで全体を覆われたレーシング使用のバイク。それだけなら普通であろつ。

しかし、その輪郭は全体的に霞でもかかったかのようにぼやけ、乗っているはずのライダーもまるで幽鬼が如くその実体が掴めない。まるで夢の中、しかも悪夢から出てきたかのような幽霊バイクは、確かな爆音と焼け焦げたタイヤ痕を残しつつ、バイクに有り得ない超高速でこちらへと向かってきていた。

上空に浮かんだ飛行指揮旗艦デュボンから見守る者達が固唾を飲んで見守る中、その幽霊バイクが二人の目前へと迫った。

「ちよく勅！」

双縄標を構えた男が、一言の呪文 道教では口訣と呼ばれる一を唱えつつ、手にした二対、都合四つの双縄 & amp; # 3 7 8 5 8 ; を高速で投じた。

正面から迫るバイクの上下左右、ちょうど十字を形成して完全に逃げ道を防いだ形になる刃は、目標を捕らえる事は出来なかった。

「！？」

バイクは突然、横に重心をずらしながら後輪を直角ドリフト、超高速のハングオンのスライドで双縄標の刃を潜り抜ける。

「はっ！」

そこへ、青年の腰間から気合と共に高速の居合抜きが繰り出される。

常人ならば認識すら不可能な速度の刃もまた、目標は捕らえられなかった。

バイクは速度を保ったままハングオン状態で車体をスピン、マックスターンとも称される高等技術で刃を華麗にすり抜けてそのまま青年の横を抜けた。

「ちっ！」

自らの刃を構えなおした二人が振り返った時には、すでに幽霊バイクは体勢を立て直してその場から遠ざかっていた。

「ウソだろ、オイ……………」

「こちらイーグル、目標への攻撃に失敗。目標は逃走した」

双縄標を腰のホルスターに戻しつつ、男は冷静な声で状況を報告。青年は手にした刀を鞘に納める事も忘れ、ただ呆然とすでに見えなくなりつつある幽霊バイクを見ていた。

『ポイントEが突破されました、ポイントFの準備を』  
「もう出来てるぜ」

インターチェンジからの合流口に、一台の大型バイクが止まっていた。

その機上には、先程の男と同じ藍色を基調としている半袖のジャケットに大胆過ぎるスリットの入ったスカートを履いた若い女性が不敵な笑みを浮かべている。

下に着込んだアンダースーツがはちきれそうな豊満な体に長い黒髪を持った女性は、首から掛けている古びた口ザリオを指先で何度かなぞりつつ、目標の接近を待つ。

『来るぞ』

「おうよ」

大型バイカー彼女専用のサポートマシン《スレイプニル》に内蔵されたサポートAI『ARES』の合図と同時に、女性はハンドル

にかけてあったメットを被り、スロットルを数度捻った。  
内燃機関とも違う、低音の風変わりな爆音と共にスレイプニルの  
車体が震える。

「ダーティエンジェル、行くぜ！」

掛け声と共に、ギヤを入れてフルスロットル。  
スレイプニルは凄まじいまでの急加速でハイウェイへと飛び出した。

本来取り付けられているウェポンベイ内臓のサイドカーが取り外され、高速用にチューンされたスレイプニルはその性能を発揮し、スピードメーターの表示が瞬く間に上がっていく。

しかし、その背後にはあの幽霊バイクが急激的に迫ってきていた。

「あたいを舐めるな！！」

『こ、こら無理をするな……』

『ARES』の忠告を無視して、女性はメーター類の下部にあるスイッチを入れる。

FIRST SAFEGUARD release

メーター内の小型ディスプレイに第一安全装置解除の表示が点灯すると、スレイプニルが更に速度を増す。

「主よ、我に邪悪なる魂戒めん為の力を与えん事を」

短く聖句を唱えながら、女性が胸の前で十字を切ると、腰のベルトに吊るしたあった特殊警棒を手取る。

「天空に在りし神の座の右に在なす東の大天使ミカエルよ！その御手に掲げし御剣を我に貸し与えよ！」

特殊警棒の伸縮スイッチを入れつつ、女性が聖句を唱える。  
すると、特殊警棒は光に包まれたかと思うとその形を変貌させ、細身の剣へと変化した。

その時には幽霊バイクは彼女のすぐ背後に迫ってきていた。

（こっちか）

自らの直感に任せて、女性は片手でハンドルを操作し、巧みに幽霊バイクの進路を塞ぐ。

彼女の思惑通り、幽霊バイクは彼女が剣を持っている右手側からスレイプニルを追い抜きにかかった。

「アーメン！」

すれ違い様、女性は幽霊バイクへと向けて剣を大きく振るう。  
しかし、剣は虚空を切った。

「！？」

斬撃がかわされた事に、女性が驚く。だが、それは同時に認識したもう一つの事実への驚愕も内包していた。

剣が狙っていたライダーの姿はバイクの機上ではなく、車体の横にあつた。

ライダーが瞬時にして体を倒し、剣をかわした事に思い当たった瞬間、重心がずれた幽霊バイクはスレイプニルの方へとスライドしてきた。

鈍い衝突音と共に、スレイプニルのバランスが崩れる。



「ちっ！」

舌打ちしつつ、クラッシュしようとする車体を強引に操作。

体を起こして暴れそうになる車体を押さえつけ、ハンドルを逆に切り、連続してギアをチェンジさせスロットルを調整。

スピンしながらも、スレイプニルは致命的なクラッシュを回避し、前衛芸術のようなスリップ痕を描きつつ路肩へとなんとか停車した。

『ターゲット、ポイントGにてロスト。完全に存在感知不能になりました』

『また消えた……か』

通信機から響いてくる報告を効きもせず、女性は呆然と幽霊バイクの消えた方向を見ていた。

「サイドワインダー……………まさか……………」  
『どうかしたのか？』

何も応えず、女性はいつまでも消えた幽霊バイクの方を見つめていた。

1999年、一部自衛隊による武力決起による東京占拠により、世界情勢は急激的に緊張状態を迎えた。

決起自衛隊による在日米軍との戦闘により東京は戦場と化し、戦火を恐れた他の都道府県は次々と日本からの独立を宣言。

直後、東京を襲った第二次関東大震災にて決起自衛隊は東京もろとも壊滅し、関西に組織された臨時政府は独立した都道府県を《シテイ》と呼称される都市国家とし、臨時政府のあった関西 Nシテ

イを首国家とする連合国家へとする事を宣言。  
ここに、事態は終息を向かえた。

だが、それは表面上だけに過ぎなかった。

東京壊滅の年を境に、日本各地で科学では解明不可能な超自然的災害・犯罪が増加の一途をたどり始める。

年を追って増えていく超自然的事件に対し、古来よりそういう《闇》を監視してきた陰陽寮・高野山・神宮寮を中心とした退魔機関の処理能力を超えるのは最早時間の問題だった。

その状況を打開するべく、ある提案が浮上した。

『宗教、思想、科学、魔法、民族、種族、それら全てを超越し、各分野のエキスパートを終結させ、独自の機動性と戦闘力を持ったまったく新しい退魔機関の設立』

この驚くべき提案は、多数の反対と少数の賛同を持って受け止められた。

かくして、その僅かな賛同者達はその力を結集させ、2025年東北・Mシティにおいてその機関の試験的設立を成功させた。

組織の名称は《Anti Darkness Defence Life members（闇から命を守る者達）》、通称<sup>アド</sup>ADD<sup>ル</sup>の誕生だった。

そして、アドル誕生から四年。

戦いは、更なる激化の様相を呈し始めていた……………

同日 夜半 アドル本部会議室

疲労と敗北感が重苦しい空気となつて漂う会議室内に、先程の作戦に参加した全スタッフが集合していた。

作戦は完全に失敗、目標の消息も不明、非の付け所の無い負け戦だった。

「疲れてる所悪いが、始めるとしよう」

会議室前部壁面に設置された大型多機能ディスプレイの前に立つた男の声に、皆がそちらに注目する。

2m近い身長に、それを更に大きく見せるような筋肉質の体格を科学者用の白衣に包んだ、ある種異様とも言える格好をし、顔には野生と知性を兼ね備えた独特の雰囲気を持った20代半ばの男は、疲れた目でこちらを見るスタッフが達を見返しながら、壁面のディスプレイにデータを出力させる。

「ケース45、通称《スタンビーター（暴走者）》の解析・浄化作戦の反省会を行う」

その男 アドル副総帥にして、直接戦闘部署であるバトル、科学解析部門であるサイエンスの両スタッフチーフを勤め、その驚異的な頭脳と非常識過ぎる行動から《史上最強のマッド・サイエンティスト》の異名を取る異才、守門<sup>もりかど</sup> 陸はこちらを見る面々のような焦燥感を微塵もみせず、淡々と会議を開始する。

「完全に失敗だったからね……………」

席の一番前に座った、長いウェーブの掛かった金髪を持った若い女性 バトルスタッフの一人、《サイレント・ネイチャー》のコードネームを持つ精霊使い、マテリア・イデリウスことマリーはため息をつきつつ、イスに備え付けのサイドテーブルに突っ伏した。

「スタンピーターの最初の目撃証言は二週間前の10月24日、午前10時19分。道交法を完全無視でハイウェイをぶつ千切り、それを起因とする事故が4件、計12台が接触、玉突きを起こして死者が5名、重軽傷者10名を出した。それだけの大惨事にも関わらず、原因となった奴は忽然と姿を消した。翌週の10月31日、同10時19分、またしても奴は出現。懲りずに道交法無視の暴走を繰り返して、今度は8台が事故、死者が4名、重軽傷者が3名出してまた消えた。交通システムに残った映像と料金所のデータ解析からそれがハイウェイに入った形跡も出た形跡も見えず、事故のあった地点でのみその存在が確認されたことから超自然犯罪と断定、本件はMシティ警察からアドルへと捜査権が移行。本日11月7日、我らアドルによるスタンピーター捕縛・浄化作戦が決行された訳だが……………」

「予想以上……………でしたね」

席の中ごろに座った、眼鏡を掛け優しい顔をしたやや背の高い男性の言葉に、その肩に留まっている大鷲 バトルスタッフの一人、《イーグル オブ ウインド》のコードネームを持つ拳法の達人にして霊幻道士、そして陸の弟でもある守門 空とその愛鳥ダイダロースーが一声鳴いた。

「すみません、私をもっと早く動きを見て いれば……………」

空の隣に座っている小柄のいかにも気弱そうな少女 特殊能力サポ―ト部門であるアビリティスタッフの一人、時空透視能力者である羽霧 由花が己の非力を詫びる。

「由花さんのせいじゃないっすよ、閃光斬をかわされっとはオレだっと思ってなかった……………」

前の席中央、一番陸に近い位置に座っている、会議場でも愛刀を手放さない二十歳くらいのちと軽そうな青年　バトルスタッフ研修生にして退魔用剣術　光背一刀流を修める修行中の陰陽師　御神渡 おみわたり  
敬一が頭をかきながらため息を吐き出す。

「作戦失敗の最大要因はそこだ。スタンビーターは半実体にも関わらず、物理学を半ば無視した高速高機動能力を有している。ハリウツドのスタント協会が大金積んでスカウトに来かねないくらいにな」  
「本物のホラー映画撮ってどうするの……」

「無論、アメリカN.O.1ヒットを取る」

「じゃああいつにその話持っていったらどうです？こんなところで暴走してないでオスカー狙えって」

表情一つ変えない陸のジョークに敬一が呆れた声で応える。

「問題は、四回目は確実にあるだろうという事だ。不通の人間なら三回もやれば飽きるだろうが、生憎と化け物つてのは律儀に何回も何十回も何百回もやってくれるからな」

「ガルーダで狙ってみたら？あれならもっと早く飛べるでしょ？」

「あまり地表に近過ぎると己の衝撃の反射で機体バランスが保てんそれ以前に、ハイウェイでドッグファイトやらかすのか？オレは別に構わんが、政治家連中が卒倒するような被害が出るぞ」

「結果は突破されましたし、あの速度じゃ縛呪の類も掛かってくれなさそうですね」

「術的、物理的両トラップが双方効果が薄いとはな。いつそ、ハイウェイごと吹っ飛ばすか？」

「さすがに三回目はヤバインじゃない？前は下からだっただけど」

「やったんですか……」

「いや、事故死した人の自縛霊が高架脚にとり憑いていて、仕舞い

には半融合体になって襲い掛かってきましたね」

「あの時は苦労したわねーホント」

「恐らく、今回も自縛霊の類だと思うが……………」

ふとそこで席中央の一番端、壁際で先程から一言も言葉を発していない長髪の女性に、陸の視線が向いた。

「瑠璃香、考え事か？」

「ん、ああ…………」

その長髪の女性 バトルスタッフの一人、天才的な格闘技能とバイク操縦技能を持つ破戒的エクソシスター<sup>とじか</sup> 十字架<sup>るりか</sup> 瑠璃香が気の無い返事をした事に全員が一斉にざわめく。

「ウソ……………」

「そんな、瑠璃香が考え事なんて！」

暴言を発した敬一の顔面に引っぺがされたサイドテーブルが直撃、敬一はその場に崩れ落ちる。

「てめえら、あたいが考え事すんのがそんなに珍しいか？」

「ああ、珍しいな」

「あんだとお！」

陸の一言に、瑠璃香がいきなり隣のイスを座っていたスタッフごと持ち上げる。

「わ……………!!」

「ちよっと瑠璃香、ストップ！ストップ！」

「落ち着いてください！」

イスごと投げられそうになっているスタッフがわめく中、マリイと空が慌てて静止に入る。

「とりあえず落ち着け。人間は凶器に使うもんじゃない」

「いや、結構使うぜ。あたいは」

「ひいひいひい……！」

「この状況でそれは冗談になってませんよ！」

「は、話せば分かるはず！」

「やるならイスだけにして！」

顔を蒼白にしたスタッフごとイスを持ち上げている瑠璃香を周囲の人間が必死になって止める中、狙われている陸は平然と懷からタバコを取り出し、それに火を付け紫煙を吸い込む。

「で、何をいらついている？何かあれに思い当たる事でもあるのか？」

紫煙と共に吐き出された陸の一言に、瑠璃香の動きが止まる。

「……天才様は何でも知ってるってか？」

「いや、まだ確実な物は見つかっていない。心当たりがあるなら、教えて欲しい所なのだな」

「……………」

瑠璃香は無言でイスを少し手荒に下ろすと、陸へと背を向けた。

「知らねえよ。疲れたからけえって寝る」

「あの、まだ会議中なんですけど……………」

「構わん、どうせ愚痴しか出す事ないだろうしな」

ふらりと会議室を出て行く瑠璃香を空が止めようとするが、陸はそれを止めようとしなかった。

瑠璃香の姿が消えてから、皆の懐疑的な視線が陸に向けられる。

「やっぱ、瑠璃香何か知ってたんじゃないの？」

「あいつがそうそう口滑らせる玉か。しゃべりたくなったらしゃべってくれるだろうよ」

「どうかなく、下手に探したら後が怖そうだし……………」

敬一の言葉に、皆が一斉に頷く。

《アドル一のトラブルメーカーにして、トラブルクラッシャー》とも言われる瑠璃香の機嫌を好き好んで損ねる人間も人外もここには存在しなかった。

「とりあえず、今考える事は次にスタンビーターにどう対処するかって事だ」

「トラップもダメ、待ち伏せもダメ。後は何が残ってるでしょうかね……………」

『うーん……………』

全員が唸りこんだまま、一分が過ぎ、二分が過ぎる。

まったくアイデアが出ないまま朝が来そうな状態を、陸が止めさせた。

「このまま考えた所で有効的なアイデアも出そうにないからな。一度寝てからゆっくりと考える事にしよう。二日後の20時にまた集まってくれ」

「そうですね、皆さん疲れてるでしょうし」

「じゃ、解散つつつ事で」



眉間にしわを寄せ、腕組みしたままドアへと向かう敬一に続くように他のスタッフ達も後に続く。

「あだっ！」

「おう！」

「ぶげっ！」

「きやう！」

拳句、前を見てなかった敬一がドアから一歩隣の壁に直撃したのに、全員が続いて玉突きを起こす。

「……大丈夫ですか？」

「いや、これくらいなんとも」

最後尾だったので巻き込まれなかった由花が心配そうに覗く中、敬一が額のコブを押さえながら室外へと出て行く。

やがて、室内には陸と空、ダイダロスの二人と一羽が残った。

「それで、兄さんは何を知っているんです？」

「お前まで言うか。まだ詳しい確証は何も掴んでいない」

「まだって事は、もう手がかりは掴んでいるんですね？」

「そういう事だ」

残り少なくなったタバコを携帯灰皿でもみ消すと、陸は資料を手にその場を去ろうとする。

「それじゃ、ボクは由花さんを送ってきますね」

「ああ、ついでに明日学校が終わった後、少し時間を取るようにつておいてくれ。それまでに確証を掴んでおく」

「無理しない程度に」

肯定か否定か、陸は適当に手なぞ振りつつ、一人事件の再解析をするべくメインコンピュータールームへと向かった。

翌日

「はっ！」

気合と共に繰り出された拳が、サンドバッグにめり込む。  
古びた上に小さい道場の中、道着姿の瑠璃香はただ一人サンドバッグに向かって汗を流しながら拳を叩き込み、蹴りを打ち込む。

「おらあっ！」

強烈な前蹴りがサンドバッグをひん曲げながら、半ば吹き飛ばすように大きく揺れる。

「ふん！」

帰ってきたサンドバッグに今度は頭突きをぶちかまし、その衝撃にサンドバッグは停止したかと思うと、一部が裂けて中の砂が漏れ出した。

「あ、やっちゃった」

漏れていく砂を見た瑠璃香が困ったように頬を掻く。  
とんでもない事に、漏れてくる砂には小石やアスファルト片のよ

うな物まで混じっていた。

「とうちゃんもどうせならもつと頑丈なの買えばよかっただろうに……けちって川の砂なんて入れやがったし」

ブツブツと文句を言いながら瑠璃香はサンドバッグを吊るすロープを外し、漏れた砂を適当に詰めなおすと、道場の隅に置いてあったガムテープで破れた個所をぐるぐる巻きにして補修する。

「今日はこれ位にしとくか」

ボロさに磨きがかかったサンドバッグを元通りに吊るすと、瑠璃香は道場を出る。

道場からの廊下は薄汚れており、玄関と風呂に通じる場所以外はうつすらとホコリすら積もっていた。

「そろそろ掃除しねえとダメかね、これは……」

道場が有る事を除けば典型的な古い一軒家には、瑠璃香がいる事以外には一切生活の二オイがしない。

普段ここに住む者がいない事を如実に語っていた。

ご多分もれず汚れ気味の風呂場で瑠璃香は無造作に道着を脱ぎ捨てる。

道着の下には胸にサラシを巻いている以外下着すら付けておらず、汗の染み込んだサラシも外すと道着と一緒にまとめて買い換えただけの完全自動洗濯機に放り込んでついでに洗剤もぶち込み、蛇口を捻ってスイッチを入れる。

後は機械任せにして風呂場へと向かった瑠璃香は、どんな時もある古い古びたロザリオ以外は糸まとわぬ体に水滴を浴びせる。

調子が悪くなっているのか、温度がなかなか上がらないシャワー

を気にもせず、瑠璃香は頭からそれを浴びる。

異性同性問わず羨望を浴びそうな均整の取れた体は、裸体になると肩や太モモが盛り上がっているのがよく分かった。

ボディビルのような膨れた筋肉でなく、柔軟性と瞬発性を重視して鍛え上げられたしなやかな体の汗を流すと、瑠璃香は拳ダコの出来ている手でスポンジと石鹸を掴み、体を洗い始める。

体を洗いながら、瑠璃香は昨日の作戦を思い出していた。

（あのテクニク……あんな真似が出来る奴はあいつしかない……けど、あいつが何故？）

肌のケアも何も考えないような力任せで体を洗いつつ、瑠璃香はただその事だけを考えていた。

「幽霊じゃない、M'sでもない。じゃあ、あいつは一体……」

どこまでも答えの出ない問いに囚われながら、瑠璃香はいつまでもシャワーを浴び続けていた……

「セッティング、OK」

『脳波同調、グリーン』

「よし、いいぞ。始めてくれ」

昨日と打って変わり、高速で車が行き交うスーパーハイウェイに、大型貨物トラックに偽装されたアドルの総合探索システム内臓コンテナ車が路肩に停車していた。

『頼みたいのは二年前の10月24日、10時19分にここで起こ

った事だ。無理はしないでいい、危険だと思ったら即座に止めるように』

「あ、はい」

コンテナ車のすぐ脇で頭部に脳波観測用のバイザーをセットされた由花が、自分の能力によって、過去を見ようとしていた。

「大丈夫ですか？無理はしないでくださいね」

「……大丈夫、だと思います」

用心のために由花の隣でスタンバイしている空に多少自信無さげに答えると、由花は過去を見た。

由花の目に移る景色がだぶり、片方が急激的に巻き戻されていく。ビデオを高速逆転させるような勢いで流れていくもう一つの景色を、それがいつの事か認識しながら、由花は目的の過去まで時間を戻そうとする。

（一月、二月、……半年……一年……）

『マスター、ミス 羽霧の脳波が少々乱れてます』

「さすがに負荷が掛かってるか……レベル3に達するようなら中断させよう」

「大丈夫ですかね……あと半年くらいなんですけど」

コンテナの中、由花の脳波と同調して彼女の見ている過去の映像を映し出す、先日開発したばかりのシステムで、その映像をチェックしているサポートAI『LINA』の打ち出していくデータを、陸とメカニックスタッフのオペレーターのレックスが由花の状態を確認しながら記録していく。

『乱れがレベル2に達しました』

「……………まずいな」

予想以上に由花の負担が大きい事に、陸が顔をしかめる。

「あと三ヶ月……………」

『脳波の乱れが大きくなってきました、警告レベルに到達』

「由花、無理はするな」

『もう少し……………です』

通信からの由花の声に危険を感じた陸は、即座に現在の彼女のライフデータをチェックする。

「あと一月……………」

『レベル3に到達！これ以上は危険です！』

「空、すぐに由花を止める！」

「由花さん！」

陸からの指示に空が由花に能力の使用を止めさせようとする。

「もう少しなんです……………」

空の手を払い、由花が目的の過去を見ようとする。

「見えた……………」

由花はそう呟くと同時に、突然力を失ったように崩れ落ちる。

「由花さん!!」

「こつちに！」

倒れそうになる由花の体を空はとっさに抱きかかえ、コンテナの中にへと連れ込んだ。

「大丈夫なんですか!？」

『心拍、やや上昇、脳波は正常値に戻ってます。能力の過負荷に失神しただけのようです』

「無理をして……………」

空が顔を曇らせながら、呼吸を整え、自らの手を由花の胸の上にかざす。

「フウウウウ……………」

息をゆっくりと吸う事によって取り入れた 外気 を肺で練る事によって体内へと取り入れ、己の 内気 へと変換させ、それを相手へと送り込む気孔術による治療を空は行い、由花の体調を安定させていく。

「用心のためだ、脳波スキャンの準備をさせておいてくれ。あとベツドの準備。ついでに由花は向こう一週間は出勤禁止だ」

『イエス・マスター』

「レックス、データを洗っておいてくれ。目標が映ってればいいが」「ちよつとノイズがありますが、大丈夫ですね」

「これは……………」

由花が意識消失寸前に 見た 物がディスプレイに表示される。そこには、猛スピードでチェイスする二台のバイクが映っていた。

「……いつか……」



## CRUEL NOSTALGIA

木枯らしを突き抜け、一台の大型バイクが疾走する。

重低音のエンジン音を轟かせ、それを駆るライダーのメットから伸びている長髪を風に舞わせつつ、バイクは道路を駆け抜けていく。やがて、目的地の手前で派手なブレーキ音を周辺に響かせつつバイクは停止。

そして、季節感を無視したかのようなボディラインを露わにしている薄手のライダースーツを着た女性、瑠璃香は被っていたメットを脱ぐと無造作にキーを引き抜き、それを指先で弄びながら目的地の店へと入っていった。

『和風軽食&喫茶 HAYATE』と店名のロゴが入ったドアを無造作に開け、瑠璃香は店内へと入った。

「いらつしゃい、あ、姉さん<sup>あね</sup>」

「よ、儲かってっか？」

「相変わらずギリギリですよ」

店内のカウンターに居た瑠璃香とほぼ同じくらいの活動的な雰囲気をする女性。店の制服なのか巫女装束にエプロン姿。が気さくに声をかけてくる。

「タケの野郎、こういう格好すれば客がいつぱい来るなんていうから着てみれば、なんか変な客が来るようになるし……」

「いいじゃねえか、なんならシスター服でも持ってきてやるうか？」

「また神父のおっさんに怒られますよ？ 去年クリスマスイベントやりたいって言ったら、教会の十字架勝手に外してきて店に付けた時の事忘れたんすか？」

「ああ、有ったんな事。今年も持ってこようか？」

「また説教会やられたくないんすけど……」

適当な席に座った瑠璃香の元に、レディースランナー時代の後輩に当たる女性がちよつと渋い顔をしつつ、お茶を運んでくる。

その足元を小さな影が抜いて、瑠璃香の足に激突した。

「あゝ」

「おう、元気だなレナ」

足に激突してきた影、1歳になったかどうかの赤ん坊を瑠璃香が抱き上げる。

「あ、すいません。最近歩き回っちゃって困ってんスよ」

「いいて、ガキは元気が一番だろ、な？」

「るゝるゝ、るゝるゝ」

舌足らずな言葉で名前を呼んでるらしい赤ん坊をあやししながら瑠璃香が自分の膝に乗せてやる。

「ご注文は？」

「そだな、いつもの軽い奴」

「かしこまりました。あ、タケの奴ちよつと出てるんで作る間レナ見ててください」

「おう。いいかレナ、おめえの母ちゃんは釘バット一本で対抗してたチーム10人まとめて……」

「あの、そういう事はちよつと……」

「じゃあ、おめえの父ちゃんも雨に濡れたセーラー服姿の母ちゃんに欲情して……」

「わゝ!!」

「じつそさん」

「どういたしまして」

HAYATEオリジナルメニュー・鳥唐揚げうどん（大盛り）を平らげた瑠璃香が、追加のお茶を持ってきた後輩がお茶を注ぎ終えるのを見ると、おもむろに口を開いた。

「ちょっといいか？」

「何asca？ 改まっちゃって」

「フェイリンを見た、って言ったら信じるか？」

「！？」

後輩の手から、中身がほとんど残ってない急須がテーブルへと滑り落ちる。

それに気付かない程、後輩は狼狽して瑠璃香に詰め寄る。

「いつ！？ どこで！？ 生きてたんスカ！？」

「いや、多分生きてない」

「……じゃあ」

「だが、死んでも言い切れない」

「どういう事っスカ？」

「《スタンビーター》の噂、聞いてるか？」

「ああ、あの同じ時間に現れてぶつとばすって奴……」

「そいつと走ってみたんだよ。で、負けた」

「姉さんが！？ バイクで姉さんに勝てる奴なんて！」

「高田さんが、アイツくらいだろうな。だけど、あの走りはどう見てもアイツだった」

「そんな、なんで今になって……」

「あたいもそれが知りたい。幽霊か、それともそれ以上にヤバイ奴

か……………」

宙を彷徨っていた瑠璃香の視線が、店の壁に掛かっていた一枚の写真に止まる。

そこには、改造されまくったバイクに囲まれ、不敵な笑みを浮かべる少女達の姿が映っている。

写真の中央にはまだどこか幼さの残る瑠璃香、その隣に同じく少女時代の後輩、そして彼女と肩を組んでいるクールそうな雰囲気を纏った少女が僅かに微笑んでいた。

同日夜半 アドル本部副総帥室

『検索結果です』

「ご苦労」

レックスが送ってきたデータを、陸は目を通していく。

料金所の記録とそれからたどった免許センターの記録、個人IDデータと最後は警察の検挙記録までからなる検索データに目を通した陸は、最後の検挙記録に書いてある部分に視線を止めていた。

「案の定か……………」

そこにあっただのはその該当人物が所属していたレディースランナーチームと、その構成員。そして、そのリーダーとして瑠璃香の名前が有った。

「変わり果てた仲間、か……………」

そう呟いた時、ノックも無しにドアが開く。  
あいさつも無しに、瑠璃香が室内へと入ってきた。

「何か用か？」

「あいつ、あたいに任せろ」

「スタンビーター、いやフェイリン・春都の件か？」

「やっぱ、気付いてやがったのか……」

瑠璃香は舌打ちしつつ、陸のデスクの上に転がっていたシガレットケースを手に取り、許可も得ないで一本啜えて引き出してシガレットケースを机の上に投げ捨てる。

「火」

「ほらよ」

陸は懐からやけにゴツくて表面に妙な表示が幾つか付いているライターを取り出して火を付けてやると、瑠璃香はゆっくりと紫煙を吸い込み、陸に向かって吐き出す。

「で、どこまで知ってやがる？」

「二年前の11月14日、スーパーハイウェイの通行データに一つの齟齬が生じている。いずみ中央の第7ICから入ったはずのバイクが一台、いつまで経っても降りてこなかった。道路公団は残存してた当該車両を搜索したが、事故の形跡も事件の形跡も一切発見出来なかった。その消えたバイクの運転者が……」

「そう、あいつだった。あたいらも必死になって探した。どこぞの偉いさんが事故を隠さなかったか、それとも変な所で事故って見つかっていないだけか……でも、あいつは見つからなかった……」

「そして、なんでか今になって出てきた。明らかに人外の者となっ

てな」

「……！」

瑠璃香の口内で、タバコが噛み千切られる。

火の付いた先端が落ちたのも構わず、瑠璃香は口の中に残っていたタバコを床へと吐き捨てる。

「なんなんだ、あいつは！　なんでフェイリンがあんな化け物になってやがるんだ！　どうしたら、あいつを、あいつを！」

「殺す、のか？　救う、のか？」

破碎音と共に、陸のデスクに瑠璃香の鉄拳が突き刺さる。

視線で相手を射殺さんばかりに、壮絶な形相となった瑠璃香が陸を睨みつけていた。

「仲間を殺るほど、落ちちやいねえぜ、あたいはよ………」

「もし、救う手段が無かったら？」

「あたいが、ケリをつける。他の誰にも渡さねえ………空にも、マリーにも、敬一にも、そして手前にもな」

「……聞くだけ野暮だったな」

陸は変形したデスクの上から、瑠璃香の鉄拳の余波でひしゃげたシガレットケースからひん曲がったタバコを取り出しつつ、デスク端のコンソールを操作する。

陸が火を付けている間に、コンソールから何かがプリントアウトされてきた。

印刷されたそれを切り取り、タバコを吹かしつつ瑠璃香へと手渡す。

「なんだよこれ？」

「今回の件と同様の事件の記録だ。もつとも253年前だな」

「……何語だ？」

「日本語だぞ、炭文字でちょっとばかり言い回しが古いかな」

「あたいは体育と美術以外は全部赤点だぜ。翻訳してくれ」

「日付は安永五年、老中・田沼 意次をスポンサーに平賀 源内がエレキテルを完成させた年だな」

「知らねえよ、誰だそれ？」

「時代劇くらい見ておけ。こいつはその年に仙台藩と南部藩の境辺りで起きた事件を担当した与力が書き記した記録らしい」

「どこの事だよ、そこは……」

「現在ならちようど、《スタンビーター》が出現した辺りだ」

「！」

「卯月七日、当時の仙台藩藩士にして屈指の乗馬の名手、三谷 真衛門が一ノ関藩への急使として赴き、藩主・伊達 重村からの書状を届けた後、行方不明になるという事件が起きた。事故、事件双方の面から周辺の探索が行われたが、結局手がかりは掴めなかった。そしてそれから半年経った神無月七日、所用で同じ道を通った一ノ関藩藩士・阿部 縁三郎が謎の騎馬に襲われ重傷を負う事件が起きる。」

それを皮切りに、同月十七日、二十七日、そして翌霜月七日と同じような謎の騎馬が現れ、街道を暴走して多数の死傷者を出した。

日中の事件にも関わらず、目撃者はそれが《黒い霞みが掛かった騎馬》と証言し、仙台、一ノ関双方の藩が強力してその騎馬の退治を試みたがごとく失敗。仙台藩は虎の子の騎馬鉄砲隊まで出したらしいが、誰もその騎馬の速さに追いつけなかったとある。

そして霜月十七日、仙台藩は切り札として行方不明になった三谷 真衛門の弟にして兄に並ぶ乗馬の名手・三谷 佐久乃進にこの騎馬の追跡を依頼。

二騎は壮絶なデッドヒートを繰り広げながら街道を爆走して消えたそうだ………」

「で、どうなった？」

「分からん。翌日、疲労が原因で死亡した馬と衰弱しきった佐久乃進が発見され、佐久乃進は「兄上」とだけ言い残して息を引き取ったとある。以後、謎の騎馬は現れなかったそうだ」

「それじゃ何も分からねえじゃねえか……………」

「いや、これで分かるのは過去の騎馬も今のスタンピーターも、なんで定期的に出現して消えるという事。そしてなんらかの方法でその存在を封印出来るという事だ。恐らくその方法は……………」

「あいつと走って、勝つ事」

「多分な」

陸は手元の灰皿にタバコの灰を落とし、瑠璃香の出した結論を肯定する。

「だが、速度が違い過ぎる。馬の最高速度は時速70km、奴の速度は時速600km。253年前の8.5倍以上だ。挙句、物理法則無視したテクニクまで披露してくる。やり合って勝てるとは思えないな」

「そうだな、走りじゃあいつの方があたいより上だった……………だが、負けられねえ、負ける訳にはイかねえ……………」

「作戦を立案しておこう。スレイプニルの超高速化改造のプランもな」

「頼むぜ」

それだけ言うと、瑠璃香は吐き捨てたタバコもそのままに部屋を出て行く。

その後ろ姿を見送った陸は、残ったタバコを灰皿に押し付けて火を消す。

「『LINA』」



『何でしょうか、マスター』

陸の呼びかけに応じ、若干ヒビが入っているデスクのコンソールに栗色の髪をした若い女性、陸が創り上げた擬似人格保有型第7世代AI『LINA』が映る。

「メカニック、サイエンス両スタッフを一時間後、会議室に全員集合させてくれ。次の作戦のプランを作成する」

『分かりました、マスター』

陸からの命令を受諾した『LINA』が、関係各所に放送を入れる中、陸は脳内で次の作戦のプランを急速的に組み上げていった……

一時間後 ADDL本部会議室

「無茶ですよそんなの！」

プラン発表と同時に、メカニックススタッフの一人が叫ぶ。  
ほかの者達も同じように頷いていた。

「時速600kmって言ったら、最新型のフォーミュラマシンのトップスピードと同じ速度じゃないですか！ 幾らハイウェイでも、公道なんですよ！？」

「それ以前に、どうやって運転する？ ブレーキをちょっと架けただけでもスピンする可能性もある。事故でも起こしたら、幾ら瑠璃香さんでも即死する可能性があるぞ」

「ただ走らせるだけならともかく、デッドヒート前提ではな……」

「理論、技術双方の面に置いて、スレイプニルを高速改造すれば速度面に置いては可能のはずだ」

予め反対意見は予想していたのか、陸はそれらの意見を聞きつつ、プランの詳細を語り始めた。

「まずスレイプニルの両サイドウェポンカー用のエネルギーラインを封鎖し全動力を機動力に変換、ウェイトバランスの調節も必要になるな。ブレーキ系も完全に高速用にセットし直し、エアブレーキの類を付属も考慮する」

「しかし、問題はやはり運転ですね……………」

「グラビティグリップシステムの性能も考慮しなくては」

「それ以前に空気抵抗だ。フルカウルタイプでもない所持たないぞ」  
「だとしたら、まず素材から見直さないと……………」

「システムはマニュアル中心にする。素材は杉本財団の素材研で開発された宇宙船用の外殻素材を流用しよう」

「マニュアル!? オートでもやばいのに!?!」

「いや、むしろオートだと誤作動の可能性も高いな」

「しかし、生身で制御できるのか? ロケットに跨るような物だぞ?」

「能書きはそんなくらいにしとけ、ボンクラども」

会議室の一番端に座っていた、作業服姿の小柄な中年男性 メカニクススタッフの榊原 繁行が口を開いた。

「おやっさん……………」

「しかし……………」

「機械屋の仕事は能書き垂れる事じゃねえ、注文された機械を手前の腕で作る事だ、違うか?」

チーフの言葉に、メカニックススタッフが押し黙る。

「しかし繁行さん、安全面はどうなります？ 技術的には可能でも、とてもマトモに乗れる代物とは……………」

「そこだな、問題は。なんか手はあるんかい？」

「せこい手だが、空の護身符を大量に張るとか、予め防護術式を発動させるといった類の術的防護を考えてはいるが、それで完全かどうかは不明だ」

「やってみなけりや分からない、ってえ訳かい。さすがに試験運転やらせる訳にもいかねえしな……………」

「やつてもらえるか？」

「安心しな、次の出勤までにはどうにかしといてやる」

「おやつさん！？」

「まだ理論構築状態なんですよ！？」

「基本コンセプトは出来てんだ。あとはいじりながら詳細煮詰めてやりゃあいい。いじってもいねえのに細かい事なんか分かるかよ」

「そんな適当な……………」

「スレイプニルの基礎フレーム設計時には高速改造仕様も組み込まれている。確かにあとはバランスの問題だろう」

「ま、機械は機械屋だ。任してくんな」

「頼む」

他のスタッフ達がざわめく中、二人の男だけが笑みを浮かべていた。

街の喧騒が遠くから微かに響いてくる中、それを否定するような静寂が、その場に満ちていた。

チリーつ無いように丹念に掃除が施された教会の礼拝堂、その祭壇の前に瑠璃香は佇み、じっと飾られたキリスト像を見上げてい

た。

小学生の時に両親を亡くして以来、この教会を家として過ごしてきたが、このようにこれを見た事が無かった事を思い出しつつ、瑠璃香は神の御子の像を見つめる。

「瑠璃香さん？」

いきなり架けられた声に、瑠璃香はそちらへと振り向く。

そこには、小柄で小太りのいかにも人の良さそうな中年の白人神父が立っていた。

「お祈りですか？ 珍しいですね」

「そんな事する柄じゃねえよ」

この小さな教会の神父にして瑠璃香の保護者、エクソシズムの師匠、かつてアジア圏屈指のエクソシストとまで呼ばれた元バトルスタッフ、ブレヴィック・オルセン神父に瑠璃香はぞんざいな口調で応えた。

「何か、悩み事が有るようですね」

「……おっさんは、ダチと戦った事は有るか？」

「ええ、一度……」

柔和な笑みを浮かべて言うブレヴィック神父に、瑠璃香は僅かに驚く。

「なんで……戦ったんだ？」

「友であつたが故でしょうね」

視線をキリスト像に向け、まるで説教のような口調で神父は続ける。

「昔の話です。私も彼も同じ時期に修行を受けていました。勤勉な彼と鷹揚な私、まるで鏡のような二人でしたが、神の意志は不平等に訪れたのです。」

話をする神父の手が胸元の十字架に添えられているのに、瑠璃香は気付いた。

「彼の心を、私は、聖職者であった筈の私は気付いてやれてなかった。彼が姿を消した時も、そして再開した彼の姿を見た時も」  
「そいつは……………」

なにか言おうとする瑠璃香を、神父は手で制して話を続ける。

「映りあった鏡であった私達は、その時、すでに相容れない者となっていました。そして……………」

神父は静かに十字を切る。

「全てが終わる時に、彼は一言だけ私に言ったのです『すまない』と」

もう一度、十字を切りながら神父は十字架に添えていた手を離し、両手を組み合わせキリスト像に短い黙祷を捧げる。

「……………」

師の独白を、瑠璃香は黙って聞いていた。  
そして、師と同じようにキリスト像を見あげる。

「鏡……か。あたいとあいつも、そうなのかな。何であいつがあなっちまったのか、あたいには分からねえ……だけど、あいつを救ってやる事は出来るかもしれねえ……」

いつも肌身離さず首に下げている、母の形見でもある古びた口ザリオを瑠璃香は我知らず、握り締める。

「もし、あなたがその人の《友》ならば、最後までその人を信じてあげなさい。信じる者に、主は必ず手を差し伸べてくれます」  
「そいつはどうかね。ただ、これだけは言える。あいつはあたいが、必ず……」

最後の一言は言わないまま、瑠璃香は静かに、決意の瞳で神の御子の偶像を見ていた……

「それじゃ。夜中にすみませんでした」

「いえいえ、お役に立てばよろしいのですが」

「調査の後、修復してお返しします」

「別に構いませんよ、蔵の隅に埋もれていた物ですし」

「それでは……」

ある民家から、古びた巻物を持った敬一とサイエンススタッフの一人がお礼を言いながら出てくる。

乗ってきたワゴン車へと二人は乗り込むと、後部座席にあった解析機にその巻物を慎重に広げて入れた。

「読めるといいんだが……」

「えらい古えからなく、残ってたのは奇跡だ」

スキャンされた結果が、解析機脇のディスプレイに表示されている。

「欠損がひどいな……補完できるかな？」

「250年は前の代物じゃあな……由花にでも見てもらうか？」

「聞いてないのか？ 彼女ならこの間の透視でちと無理して守門博士から能力使用停止食らったって」

「あゝ、そーいやそうだった。便利なんだが、使う当人があれじゃあな」

「ADDLの女性陣はガチばっかだからな。ああいうのはいいと思うぞ」

「空さんが予約済みって噂、本当だと思うか？」

「五分五分って所だろ。オレだったらもうちょっと……、ってこれでどうだ？」

腐食部分や欠損部分を補正した画像が、ディスプレイに表示されていく。

「んゝつと、有った有った。真衛門に、佐久乃進。没年は同じになってるな」

「ちよつと待ってくれ、ほらここ……」

「えゝと、真衛門・妻 しず。これも同じ没年になってるな」

「これ以上は書いてないな。仕方ない、もう一つの方行くか」

「……今からか？」

もう一つ、の指す場所がどこか分かっている敬一が露骨に顔をしかめる。

「仕方ねえだろ、それとも守門博士に睨まれたいか？」

「怖いんだよね、陸さんって顔でも声でもなく、気配で怒っから……」  
「無意味に八つ当たりしないところがまた怖いんだよね。じゃ行くぞ、三谷家の菩提寺に」

「よし、じゃあ風圧テストやつぞ」  
「へーい」

ADDL本部の格納庫の片隅で、超高速仕様にカスタムされた《スレイプニル》が風圧テスト用の小ドームに入れられる。

その外観は通常時よりも一回り大きくなっており、その元となっている薄い光沢を持った特殊素材のカウルが、フロントから紡錘型に先端に張り出し、乗降のための狭い空白と僅かに覗くタイヤ以外は全てを覆い、気流を受け流すために計算された曲線を描き出しながら、後部にまで達している。

そしてそのカウル内部に増設された高速走行用に増設された多種のメカニズムが、半透明のカウル越しに重厚な存在感を出す。

「ようし、流せ」

スイッチが入れられ、ドーム内の送風機が回る。

実際の走行時の風の当たり具合を確かめるために煙が混ぜられた風が、取り付けられたばかりのカーボン・チタン複合結晶素材のボディに吹き付ける。

その辺り具合や風の流れ具合をつぶさにチェックし、得られたデータを実際の風速に変更したシュミレートが画面に表示されていく。

「バランスはいいみたいです」



「だが、実際の風圧はこんなモンとは比べ物にならねえ。こんなのは気休めだ」

シュミレートデータを見たメカニックススタッフの言葉に、チーフの繁行は顔をしかめる。

「そんな事言っても、時速600kmつすよ？　どこでそんな走行実験やれって言უნすか？」

「仕方ねえ、明日一番に知り合いにどっかのサーキットでも」  
「出来たかい？」

頭をかきむしる繁行の背後に、いつの間にか立っていた瑠璃香がドーム内のスレイプニルを見る。

「へえ……結構見てくれはいいな」

「問題は実際の走りだな。こいつばかりはシュミレートじゃどうにもならねえ」

「じゃあ、走ってみればいいだけの話じゃねえか」

「そうだな。こいつが全力で走れるくらいのサーキットが………」

言葉の途中で、ドームのドアの開閉音に繁行がそちらを見た。

そして、仕上がったばかりのスレイプニルに跨る瑠璃香を発見する。

「……オイ」

「じゃ、行つてくらあ」

「ちよつと待った……」

慌てて制止に入るメカニックススタッフを尻目に瑠璃香はイグニッションを入れ、アクセルグリップを回しこむ。

メインエンジンとして搭載されている小型常温核融合炉が唸りを上げ、タイヤが高速で回転を始める。

暴れ馬よりもはるかに凶暴な車体を巧みに操作し、周囲のメカニックススタッフ達を掻い潜って瑠璃香の駆る《スレイプニル・SH（超高速度）タイプ》が格納庫から飛び出していく。

「……………オイ」

「行っちゃったぞ……………」

「どうする？」

「どうするもこうするも……………」

「あゝ、陸か？ 馬鹿が一人飛び出してたが、どうする？」

困惑するスタッフ達を無視して、繁行はそばの壁にあるコンソールから陸へと手早く連絡する。

「やっぱそう思うか？ オレもそうだ。分かった、そういう事にすつか」

「……………おやっさん、どうするんすか？」

コンソールを切った繁行に、メカニックススタッフが恐る恐る聞いてくる。

「ほっとけだってよ。いい具合に走行試験やてくるだろうしな」

「ほっとけ……………って、高速仕様過ぎて公道走れる代物じゃあないんすけど……………」

「だからこそよ、帰ってきたら調整やつから準備しとけ」

「いいのかなー？」

あまりの適当さに、メカニックススタッフ達は顔を見合わせた。

「グダグダ抜かしてんじゃねえ、早いとこモニタシステム起こせ！  
記録の準備もだ！ モタモタすんな、嬢ちゃんが飛ばし始めちま  
うぞー！」

チーフの怒声にスタッフ達は慌てて倉庫の中を走り回り始めた

『瑠璃香！ 何考えてるんだ！』

「ん？ いたのか」

『いたのかじゃない！』

外へと通じる通路を疾走するスレイプニルの小型ディスプレイに、  
サポートAI『ARES』の顔が映し出される。

『まだ微調整が済んでないんだぞ、この機体！』

「そんなモン、走った後でやりゃあいい」

『そんな無茶苦茶な………あ』

「どした？」

『陸からの許可が下りちまった』

「それじゃ、遠慮する事ねえな」

『コラ待て……』

アクセルが更に絞られ、スレイプニルが更に加速する。

外へと通じる扉が開ききるよりも早く、漆黒の弾丸と化したスレイプニルが深夜の市街へと飛び出した。

「じゃあ行くぜ！」

『待ってる！ 今交通量の少ないポイントを検索して』

「いらねえよ！」

風を切り裂きながら、スレイプニルは公道を制限速度を物理無視して疾走する。

『ノーヘルの上に速度無視だぞ！』

「わり、忘れてきた」

『事故つたら確実に死ぬぞ！』

「まだまだ、こんなモンじゃねえぞ！」

スレイプニルは更に加速し、目に映る光景は尾を引いた残像のみとなっていく。

『赤信号！』

「飛ばす！」

信号を無視し、両側から来た乗用車とトラックの隙間を僅かなバランズ移動のみで回避し、スレイプニルは交差点を通り抜ける。

『歩行者！』

「なんの！」

瑠璃香はグリップ根元のエア・ジャンプスイッチを押し込む。車体下部のエア・ジャンプシステムが起動、瞬時にして爆発に近い勢いで圧縮空気が噴出され、スレイプニルの車体が宙へと跳ね上がり、横断歩道を横切る歩行者達の頭上を飛び越え、着地する。

「おし！」

『頭上通られたオヤジ凍ってるぞ……………』

「風圧でちよっと頭のバーコードが進んだかもしれねえな」

『そついう問題じゃなく！』

市外を爆走するバイクに、段々周辺の人間が騒ぎ始める。

『そのノーヘル暴走バイク！ 停まりなさい！』

「お、もう来やがった」

真後ろに着いて警告してくるパトカーを楽しげに見ながら、瑠璃香は更に速度を上げる。

『こら停まれ！ 停まらんか！ 停まらねえと自爆テロ容疑で射殺すつぞゴラァ！』

『随分とガラの悪い警告だな……………』

「はっ！ やれるモンならやってみやがれ！」

真後ろのパトカーに中指なぞおっ立てつつ、瑠璃香は速度を緩めようとしなない。

『貴様、道交法改正案を知らんのか！ 事故を及ぼす危険のある車両を警察は排除できんだぞ！ 改正した時から一度やってみたかった！』

「血の気の多いポリだな」

『おい、向こうの言ってる事本当だぞ！ 周辺のパトカーと白バイ全部こっちに向かってる！』

「へっ、久しぶりにやってやらあ！」

前の交差点の左右から来たパトカーをすり抜け、スレイプニルは更に加速。

背後から加速してきた白バイがスレイプニルに並ぼうとするのを、アクセルを吹かして追隨を許さない。

『ようし、停まらないな！ 停まる気無いんだな！ 撃つ！ 撃つぞぉー！！ オレに銃を撃たせろー！！！！』

どこか警官としてあるまじき警告を発しつつ、背後のパトカーから発砲音と共に飛んできた弾丸が瑠璃香の髪をかすめる。

『オイ！ 本気で撃つてきたぞ！』

「非殺傷のゴム弾だろ。そんなモンであたいが止められるか！」

連射されるゴム弾をかわしつつ、瑠璃香は背後に続々と集まりつつあるパトカー群とデッドヒートを繰り広げる。

『いい！ いいぞお前！ スカウトしたいくらいだ！ さあもつとオレを楽しませてくれ！』

『誰かあのバイクと前の馬鹿を止める！』

『もう何がなんだか………なんであれでこの街の治安守れてんだ？』

「ガチと馬鹿だけだったら汚職も無えからな。両方揃ってるとちとマズイが」

『お前もだろ！』

「その通りだ！」

瑠璃香は破顔しながらクラッチペダルを操作。

温存していたトップギアに入ると、今までとは段違いの速度でスレイプニルを急加速させる。

『待て！ 待たんかあ！ もっと撃たせろ！お前のどてっ腹にしこたま撃ち込ませろー！！』

『馬鹿確保！！』

何でか先頭にいたパトカーに他のパトカーが群がるのを確認もせ

ず、瑠璃香は市街地を抜け、スーパーハイウェイのICへと向かう。

「払い頼むぞ」

『つつたく……………』

『A R E S』がETCへと信号を送り、ゲートが開くと瑠璃香はスーパーハイウェイへと突っ込む。

『一般車両もいるんだぞ！ 分かっているだろうな！？』

警告も聞かず、瑠璃香はスロットルを全開。

居並ぶ車両を次々と抜き、更に速度を上げていく。

どんどん強くなっていく風圧に、瑠璃香は体を完全に車体に預けるように押し付け、暴れようとする車体を押さえ込む。

速度は更に上がり、小型ディスプレイの表示速度はすでに時速300kmを超えていた。

『これ以上はその装備じゃ無理だ！ 速度を落とせ！』  
「うるせえ」

低い声で一喝して、瑠璃香はギアをハイトップにチェンジ。

弾丸のような速度で、スレイプニルが加速していく。

目まぐるしい速度で表示速度が跳ね上がり、かなりの速度で走っているはずの周囲の車もただの静止物と変わらないレベルにまで相對速度が上がっていく。

『400……………450……………500……………550……………』

全て諦めたのか、『A R E S』は静かに現在速度を読み上げる。

瑠璃香はそれを聞きつつ、ただ黙って大気を切り裂く矢となった

スレイプニルを駆る。

『570……600!』

最早切り裂かれた大気の唸り以外は何も聞こえない状態で、瑠璃香は音速の半分にまで達した凶悪な暴れ馬を走らせる。

しばし、最高速度を維持させた瑠璃香は、やがて静かに速度を落としていく。

周囲の背景がゆっくりと実像を帯びた物となっていき、大気の唸りも消えていく。

通常の制限速度まで落としたスレイプニルは、パーキングへと入っていくとようやく停まった。

「いける……、こいつなら」

『頬、切れてるぞ』

カウルの隙間から入り込み暴れた風との摩擦で切れた頬から滴る血を拭いもせず、瑠璃香は不敵に微笑む。

「待ってろ、今あたいが追いついてやる……!」

頭上に浮かぶ星に向かって、瑠璃香は固く握り締めた拳から親指を突き上げた……



## SILENT DAYTIME

拳ダコだらけの手に握られた鉛筆が、微かな音を立てながらスケッチブックの上を走る。

時に繊細に、時に大胆に鉛筆が走り、やがて紙の上に一つの像が描き出されていく。

「ん」

瑠璃香は床に座り込んだまま鉛筆を握った手を突き出し、目の前の《スレイプニル・SHタイプ》の縮尺を図るが、力余って握っていた鉛筆がへし折れる。

「おっと」

折れた事を気にせず、瑠璃香は用意しておいた自動鉛筆削りに残った鉛筆を突っ込んで新たに芯を出すと、再度スケッチに取り掛かる。

よく見れば、周囲には同じようにして折れた鉛筆が何本か転がっており、彼女がかなりの時間この作業を続けているのを物語っていた。

「ん、こんなもんかな」

「どれどれ？」

整備をしていたメカニックススタッフ達が、瑠璃香のスケッチを覗き込む。

そこには、あらゆる角度から描かれたスレイプニル・SHタイプの緻密なスケッチが何ページにも渡ってあった。

「相変わらず、上手いな」

「まんま描かないで下さいね、後で面倒になるから」

「しねえよ、資料だ資料。ネーム締め切り明日の午後までだしな」

「作戦明後日つすよ……………」

「あゝ、今晚中にまとめとくか。締め切り遅れっと、おっさんうるせえし」

「連載一本きりでいつも締め切りギリギリって方が問題じゃ……………」

「じゃあこっちの仕事減らしてくれ。お陰でネタには困らねえけどよ」

折れた鉛筆はそのままに、瑠璃香が筆記用具を片付け始めた所で、瑠璃香の腕時計が通信アラームを鳴らす。

「陸か、何だ？」

『瑠璃香、至急副総帥室まで来てくれ』

「あたいはこれから仕事なんだが……………」

『恐らく、お前にとって重なる事となる話だ』

「ちっ、分かったよ。人使い荒い野郎だ……………」

ぶつくさと文句を言いながら、瑠璃香はスケッチブックを片手に陸の元へと向かう。

「元・レディーランナーで現・漫画家兼エクソシストたあね……………」

……

「ココで一番の変り種だよな、あいつ」

「おら！ くっちゃっべてる暇あったら手え動かしな！」

「へい」

チーフにどやされながら、メカニックススタッフ達はスレイプニル

の最終調整に取り掛かっていた。

「おう、来たぞ」

「来たか」

横柄に部屋へと入ってきた瑠璃香に、陸は横目で見ると今日を通していたレポートを修理されたばかりのデスクの上へと置いた。

「今回の事件と過去の事件。双方の類似点の最終結論報告だ」

「そんなの、お前が目を通しときゃ済むだろ。どうせあたいたいじゃ読んでも忘れっぞ」

「そうでもない」

陸はレポートをめくり、目的のページを開いて瑠璃香へと差し出す。

そこには、一人の少女の写真が添付されていた。

「誰だこい…っ?」

「三谷・ユウリン。フェイリン・春都の妹だ」

「妹!? あいつにそんなのがいるなんて聞いた事ねえぞ!」

「離婚した父方に引き取られていたそうだ。生まれつき心臓に疾患があり、二年前の11月14日、手術を行った。成功率は五割だったそうだが、一応は成功している」

「じゃあ、あいつは妹の所に行こうとしてた、のか……………」

「恐らくはな。それは、253年前の事件とも一致している。光谷家の菩提寺にあった記録だと、真衛門の妻しずは病気を患っており、彼はその妻の元に急いで帰ろうとしていた所で行方不明になったそうだ。」

ちなみに、フェイリンは三谷家の直系の子孫に当たる。ここからは推測だが、《スタンビーター》は速さで生きるタイプの妖怪だが、自分ではその速度を制御しきれず、それを制御するための技術を持った魂を捕縛、同化して自らの能力を補完すると思われる」

「ちよつと待て。それじゃあ、あいつは今でも妹の所に行こうとしてるのか!？」

「出現場所が同じ事から、その可能性は高いな。《スタンビーター》は技術を持った人間がもつともその技術を駆使する時を狙って…」

陸の推測は、瑠璃香の拳がデスクに叩き込まれた音で中断された。再度デスクを破壊した事を気にも止めず、瑠璃香は壮絶な憤怒を形相をたたえていた。

「ふざけるな……二年だぞ……あいつは、二年も捕らえてた拳句、今でも妹の所に行こうと……頑張ってるのかよ………」

「あの状態だと、フェイリン・春都の自我が残っているかどうかはかなり疑わしい。最後の意識を半ば本能的に利用されているだけかもしれない」

「もつと悪いじゃねえか! あいつが! あんなに速かった奴が二ンジン下げた馬扱いされてんのか!！」

振り下ろされた拳が、デスクを更に原型留めなくなる寸前まで変形させる。

力を込めすぎたのか、傷ついた拳から血を滴らせつつ、瑠璃香は俯き、伏せられた顔から歯軋りが漏れてくる。

「追い討ちを掛けるようで悪いが、三谷・ユウリンの手術は成功だったが、精神性の発作をたまに起こすらしい。別々に引き取られても姉妹の仲は良かったそうだからな」

「……また会わせてやる事は出来るか?」

「多分無理だ。完全に捕食、もしくは融合されているだろうからな。そんな変わり果てた姿を見せるつもりなら話は別だが」  
「分かったよ……………」

瑠璃香は傷ついた拳を拭いもせず、陸へと背を向ける。

「今回の事件、あたいが全部力タをつける。手え出すなよ」  
「こつちが殴られたくないからな。任せよう」

破壊の惨状をそのままに、瑠璃香が部屋から出て行く。

陸はため息一つきつつ、懷からタバコを取り出し、火を付けてそれをゆっくりとくゆらせた。

翌日 昼過ぎ

『リンファー!!』  
『だめだルピス! 彼女はもう…!』  
『どうにか、どうにかなんねえのか!』  
『完全に融合している……………もう……………』

「うゝん……………」

教会の一室、散らかり放題に散らかっている自室で、ネーム（漫画の原案ラフ）を書いていた瑠璃香の手が止まる。

「うゝ……………」

頭をかきむしり、唸りを上げた所で手にしていた鉛筆をほうり投げ、そのまま背後に倒れこむ。

「だあ……ご都合主義じゃ思いつかねえな……」  
「まだ出来てないんですか？」

首だけ起こして上下逆になった瑠璃香の視界に、スーツ姿がまだなじんでいない、いかにも新人そうな青年 瑠璃香の表の顔である新人少女漫画家 来栖 ルリの担当編集である浦和 潤がこちらを見ていた。

「あん？ 潤平、来てたのか？」

「来てたのか、じゃないですよ。約束の時間になっても来ないから、また忘れてるんだろうと思って……」

「わり、忘れてた」

「……やっぱり」

軽いめまいを覚えつつ、潤は瑠璃香の書きかけのラフへと手を伸ばす。

「まだ途中みたいですな」

「あゝ、煮詰まらなくてな」

書きかけのラフに目を通していた潤が、首だけで完全にブリッジの体勢へと移行している瑠璃香を見た。

そこで、肌寒さを覚えるような室温にもかかわらず、Ｔシャツの上から丈の短いガウンを羽織っただけの瑠璃香の豊かな胸の谷間がモロに視界に飛び込んできて赤面しつつ慌てて顔をそむける。

「片付いてねえ事件だしな……」

「片付いてない？ 普段そんなのネタにしないんじゃない？ ありませんでしたっけ？」

「この話だけは、どうしても描きたくてな……………」

彼女がエクソシストだという事を編集部内で唯一知っている潤は、彼女の描く話が全て実体験を元に行っているという事を思い出し、首を傾げる。

「じゃあ、この話……………」

「わり、明日には片がつくから、それまで待ってくれねえか？」

「…………締め切りまであと二週間切ってるんですよ」

「落としたのは今の所一回だけだろ？」

「デビューして一年の新人が落としてる時点で問題ありますって。」

まあ、入院してたんじゃしょうがないですけど……………」

「あん時は敬一の野郎、模擬戦のくせに本気出しやがったからな。腕一本折っただけじゃねえか」

「…………更に折ったりしませんでしたよね？」

「カウンターで腹に一発ぶち込んだら、あいつ血反吐吐いて倒れやがったっけ。空の奴が慌ててたな」

「前に素手で特殊機動隊のパワードスーツ倒した事有るって言ってませんでしたっけ？」

「ああ、あいつら顔面のフェードがヤワだからな、正面からぶつこめば簡単に割れんだよ」

「ライフル弾すら防ぐ防弾アクリルだって聞いた事が……………」

「そしたらあいつら、よってたかって襲ってくるんだもん。半分は潰してやったけど」

「バイオレンスな人生送ってますね……………」

この一年で、瑠璃香の担当編集はすでに自分で三人目（内一人は再起不能）の理由を改めて思い知りながら、潤は残日数と瑠璃香の

執筆速度を脳内で計算していく。

「じゃあ、明後日の昼までにまとまります?」

「OK、やっつく」

首ブリッジの体勢から、一挙動で起き上がった瑠璃香が、いきなり着ていた物を脱ぎ始める。

「な、何を!？」

真っ赤になりながら顔を横に向けた潤を無視して、瑠璃香は仕事の脇に放っておいたライダースーツを手にとってそれに着替える。

「潤平、ちよつと気晴らしに付き合え」

「あ、仕事が溜まつてるんで編集部に戻らないと……」

「後でやりやいいだろ、付き合え」

「い、いやああああー!!」

泣き叫ぶ潤の襟首を引っつかみ、片手で引きずり、もう片方の手で勝手口に吊るしておいたヘルメットを二つ取ると、瑠璃香は教会の外に止めてあった自分のバイクに乗り、その後ろに強引に潤を乗せる。

「お、降ろして下さい! まだ死にたくないー!!」

「大げさな奴だな、前に白バイとチキンレースやったのがそんなに嫌だったか?」

「誰だつて嫌ですよ、お、降ります!」

「行くぞ」

後ろの悲鳴を無視してヘルメットを強引にかぶせ、自らもかぶる



と瑠璃香はバイクのエンジンを回し、いきなり猛加速で発車させる。

「わああああ！」

「ちゃんと捕まってるよ。落ちたら死ぬぞ」

「嫌だつて言つたのにいいい！」

背後から命がけでしがみつかれるのを感じつつ、瑠璃香はスロットルを捻って速度を上げる。

「トばすぜ」

「だめええええ！」

すでに法定速度を倍数で突破しているバイクは、前を行く車の間を縫うようにして通り抜け、道を疾走。

エンジンの駆動音に風の切り裂き音、それに情けない悲鳴を響かせつつ、二人乗りのバイクは公道を突き抜けていく。

「ヒュウウ！」

「ヒイイイイ！」

並んだ車の間を、スピードを一切緩めず、バランス移動だけで巧みに車体をスライドさせてすり抜け、さらに加速。

「し、信号！ 赤！ 真っ赤！」

「突っ込む！」

ちょうど信号が変わり、前方の交差点の左右から進路を塞ぐように出てきた車に対し、瑠璃香は軽く車体を左右に振ってわずかな移動で隙間をすり抜け、最後の大型トラックには思いっきり車体を倒しながら前輪ブレーキを握りこんで後輪をドリフト、両足を擦り付

ける寸前まで倒れたバイクは見事にトラックの下をすり抜ける。

即座にクラッチペダルを操作してギヤを落とした瑠璃香は、アクセルを回してエンジンの回転数を上げ、惰性も利用して車体を即座に引き起こすと再度速度を上げる。

「ざつとこんな物か……」

「し、死ぬ、死んでしまう………」

道交法根底無視の瑠璃香のドライビングテクに、後ろの潤はすでに顔面どころか全身から血の気が引いている。

「あん？」

ふと、瑠璃香は背後から無数の改造エンジンの音が近づいて来ているのに気づいた。

さらにはそれにやかましいクラクションなんかも混じり始める。

「あ、あのヤバ気な方達が………」  
「みてえだな」

派手な柄の施されたライダースーツを着た男達が駆るバイクが、瑠璃香のバイクの左右へと並んでくる。

「よお、昼間っからやってるじゃねえか。オレらと遊ばねえかい？」  
「……………」

ノーヘルで声をかけてきた男に、瑠璃香は無言。

「聞こえてんだろ？ ああ？」  
「いい腕してるな、何者だ？」

反対側に並んでいるバイクから、値踏みするような声でリーダーらしき男が声をかける。

「なんだ、ラックじゃねえか」

「？ オレを知ってるのか？」

「見忘れたのか？ あたいを」

瑠璃香はフェイスを上げ、リーダーへと顔を向ける。  
それを見たリーダーの顔色が一瞬で変わった。

「て、てめえ《鬼夜叉》！」

「久しぶり、元気してたか？」

瑠璃香の問いに答えず、リーダーは慌てて路肩へと寄せながら急ブレーキ、即座にバイクを反転させた。

「リーダー？」

「逃げろ！ そいつは《鬼夜叉》の瑠璃香だ！ 取って食われたい  
なければ逃げるんだ！」

「あ、あの！？」

「に、逃げろ！ 殺される！」

「むしろ犯される！」

リーダーの言葉を聞いた者達が一斉にバイクを反転、大慌てで逆方向へとバイクを全力疾走させていく。

「……………なんでえ、腰抜け連中が……………」

「ああいう人達が逃げるの初めて見ましたよ……………」

「ああ、あいつとは前に遊んでやった事があったからな」

「それで何であの反応なんですか……………」

「ラックの野郎、喧嘩にポン刀なんて持ち出してきやがったんで、白刃取りからへし折ってついでに半、いや三分の二殺しにしてやったからな」

「……………」

潤は日本刀よりも危険な技を持った人間の後ろに乗っている事に本能的な恐怖を覚える。

「思い出すな、あん時はあいつも一緒だったっけ。ぶん投げたラックがあいつの愛車にぶち当たって怒ってたなあ……………」

「もうちょつとおとなしい思い出ないんですか？」

「ついでだからラックのチームから顔が可愛いのを二人ばかり持ち帰って…」

「そこから先結構です」

なんでこんな人が少女漫画書けるんだろうか？ とものすごく重大な事を潤が悩んでいる内に、バイクは街中を走り抜け、郊外の峠道を進んでいく。

「カーブ！ スピード！ 落とし…」

「舌かむぞ」

峠独特の急カーブに、瑠璃香は一切スピードを落とさずに突っ込むと、急に体を倒してドリフトさせつつガードレールぎりぎりまで迫ると、スリップする寸前でグリップを取り戻して異常なまでに鋭い角度でターンするとカーブを切り抜ける。

「まだまだ……………あいつはもっと……………」

「……………」

瑠璃香にしがみついた状態で失神している潤を無視して、瑠璃香は己のドライビングテクを確かめるように次々とカーブをクリアしていく。

そして、峠の頂上にある展望台まで来ると、ようやくバイクを停車させる。

メットを脱いだ瑠璃香が、後ろで硬直してる潤のメットを取ると、うつろな目をしている潤を思いっきり揺する。

「おい起きろ潤平」

「ああ……婆ちゃん、ひ孫はまだだよ………」

「逝くな、おい」

「はっ！？ 今、一昨年死んだ婆ちゃんがひ孫の命名準備を！」

「隠し子でもインのか？」

「い、いえ身に覚えは………じゃなくて、ここは？」

「………あいつと最後に走った場所。結局、一度も抜けずじまいだったな………」

「………そうですか」

あえて詳細を聞かず、潤は瑠璃香と共に眼下に広がる景色を見下ろす。

夕刻へと変わりつつある街は、ゆっくりとその景色を紅へと染めていった。

「あれから二年、か………あたいが漫画家やってるなんて思っただろうな」

「まあ、確かに………」

過去を邂逅しながら、瑠璃香は展望台のイスに座ると懐からタバコを取り出してそれを口に咥える。

そこで、ライターを忘れてきた事に気づいて舌打ちした。

「火、有るか？」

「持ってませんよ、それ以前に未成年で喫煙は止めた方が……………」

「加減はしてるよ、呼吸器弱らせねえ程度にはな」

「ファンには見せられない姿だよな」

「悪かったな、イメージと違ってよ」

「あんまり素行悪いと、人気あっても切られますよ。ただでさえ最近オレ生命保険に入れて編集部内から言われて」

「前のオヤジは殺してねえぞ？」

「なんでか編集部辞めて女性人権保護運動に協力してくるとか言って中東に行きました」

「両方潰してやったからな」

「前々からセクハラで問題あった人だったみたいですからね。編集を再起不能にした女性漫画家は史上初めてだったか……………」

「いきなり胸元に手突っ込んできた奴の方が悪いだろ」

「じゃあブラジャーくらい着けてくださいよ……………」

何を言っても無駄な気がしながら、潤は瑠璃香の向かいへと座る。

「…………無理はしないでくださいね。先生の漫画が読みたいファンは大勢いますから」

「そだな」

展望台の壁にもたれかかり、瑠璃香は頭だけ後ろへと向けて気だるい顔で背後の上下逆の景色から展望台の天井へと視線を移す。

「下手したら、死ぬかもな」

「へっ！？ そんなに次の仕事危険なんですか!？」

「かなりな。ぶっちゃけ、勝てる自信はねえ」

「怖い事言わないで下さいよ……………」

「じゃ、ちよつと協力してくれるか？」

「え？ オレに出来る事だつたら」

にやりと笑いながら、瑠璃香は懷から中に聖水が満たされた小さなクリスタルの六角柱を取り出すと、それを放り投げて指で弾く。澄んだ音が響くと同時に、クリスタルはまるで吸いつけられるように展望台中央のテーブルに落ちて転がりもせずに停止する。

「あ、あれ？」

「さてと、じゃ協力してもらおうか」

邪悪ささえ感じる笑みで、瑠璃香が潤へとにじり寄る。

本能的に走り出そうとした潤の足を瑠璃香の足が払い、転倒する寸前に袖を取られ、落下速度を調節されつつ反転し、そのまま地面へと押し倒される。

「あの、何を？」

「なんでも協力するって今言つたじゃねえか」

やたらと手際よくスーツを脱がせていく瑠璃香に、潤は大慌てでそれを止めようとする。

「や、止めてください！ こ、こんな場所で！」

「安心しろ。結界張つといたから、外からは何が起きてるか分からねえし、入ってくる事も出来ない」

「そ、それ以前の問題です！ 何でいきなり！」

「陸から聞いてないのか？ 房中術とか言うらしいが、やった相手の生気を奪う術があつてな、あたいは生まれつきそれが出来る体質なんだ」

瑠璃香が説明しながら、嬉々として手際よく潤のYシャツのボタンを外していく。

「あの、ひよつとして協力って……………」

「やらせろ」

「わ〜〜〜！」

ズボンへと取りかかった瑠璃香の手を潤がなんとか剥がそうとするが、瞬時にしてボタンを外されていたスーッとシャツを腕の半ばまで下げられ、両腕を封じられる。

「ど、どこでこんな技！」

「ん？ 父ちゃんから喧嘩で使えるって教わった」

「使用用途違いま、ってそ、それはダメ〜！」

ベルトが抜き取られ、即座にそれで膝が縛られる。

「暴れるなよ、ヤリにくいだろ？」

「さも当然な声で言わないで下さいよ！」

「受けはイヤか？」

「そういう問題じゃなくて！」

「あ、そういう事が」

何か思い当たったのか、瑠璃香はズボンのチャックにかかっていた手を止めると、妖艶な笑みを浮かべながら、自らのライダースーツのチャックに手をかける。

「あ、あの……………」



ゆつくりとチャックが下げられ、スーツの下からサラシで包まれた瑠璃香の豊満な胸が露になっていく。

思わず潤の喉が鳴ったのを見届けると、瑠璃香はライダースーツの袖を脱ぎ、サラシも解いていく。

解けたサラシが半身だけ脱いだライダースーツと共に瑠璃香の腰に落ちる。

「そそるだろ？」

「いや……その……」

挑発するように潤の目を覗き込みながら、胸元に揺れる古びた口ザリオを瑠璃香はなぞる。

鍛えられ、引き締まっている体と、露になっている豊満な胸に、潤の言葉が詰まる。

「何か言ったらどうだ？」

「………って、ぬ、脱がないで下さい！」

「なんだ、着たままの方いいか？ この格好だとそいつはちと」

「そうじゃなく……」

「うっさい」

「!？」

潤の口を、瑠璃香の唇がいきなり塞ぐ。

いきなりの事に潤が混乱する中、ニコチンの匂いがする舌が口腔内に侵入し、ゆつくりと中を蹂躪していく。

蹂躪を終えた舌が、唾液の筋を伴って口腔内から撤退する。

「る、瑠璃香さん……」

「あんまり騒ぐと、思いつきりハードな事すつぞ？」

間近でお互いの顔を覗きながら、瑠璃香が潤に宣言する。

「その、立場上問題に……………」

「女から誘ってるのに、そんな野暮言うのか？」

再度、瑠璃香の唇が潤の口を塞ぐ。

今度はすぐに離れると、瑠璃香は潤の瞳を正面から見据えた。

「分けて欲しいんだよ、お前の力をさ」

「……………建前でしょう」

「あ、バレてた？」

いたずらがバレたような顔をしながら、瑠璃香は潤の胸に口付け。

「でも、半分は本当だぞ？」

「とか言いながら、ズボン！」

「脱がなきゃ出来ないだろが。それとも、やっぱ着たまま？」

「それはまた今度……………じゃなくて」

「じゃ、黙ってる」

ライダースーツを脱ぎ去り、胸の口ザリオ以外一系まとわぬ瑠璃香が潤の上に覆い被さる。

「まったく下着着けてないって、本当だったんですね……………」

「だから黙ってるって」

胸を押し付けるようにしながら、瑠璃香はまた口付け。

「何だ、準備できてるじゃないか」

「そ、それはまあ……………」

潤の下半身をまさぐりながら、視線をそらそうとする当人を無視して瑠璃香はそこへと口を寄せる。

「ふっ、あ……………」

「なひゃへないほえはふな」

思わず声を漏らす潤を無視して、瑠璃香はそこを丹念に刺激していく。

準備が完全に整った所で、口を離すとお互いの顔を見る。

「……………死なないくださいね」

「分かってるよ」

夜の帳が下りていく中、二人は一つに重なっていった。

翌日 アドル本部

「……………遅い」

「遅いですね」

「遅いな」

戦闘準備を完全に整えたバトルスタッフ達が、発進間近のデュポンの前で眉根を寄せていた。

「遅くても作戦の2時間前には集合って言っただいたわよね？」

「ボクも聞いてます」

「あいつが守った事は一度も無いけどな」

陸の一言に、その場にいる全員に重い沈黙が降りていく。

「通信機も持たないで、どこに雲隠れしてんのよ」

「瑠璃香さんの事ですからね、バイクで行ける所ってのは確かです」

「どっかで結界張りやがったのか、反応すら感知できないときいてる。さてどうしようか……」

「オルセン神父譲りの結界ですから、出来はトップレベルですしね」

「そもそも失踪した拳句に結界張って何やってんのよ！」

「男でも連れ込んでるんだろ、女の可能性も有るが」

「そ、そうなんですか？」

ようやく能力使用停止が解除されて作戦に参加する事になった由花が、陸の言葉に赤面する。

「あいつはそもそもそうやって能力を高めた奴だからな。東洋、西洋それぞれに性魔術ってのはあるが、地で出来る人間は少ない。……やってみるか？」

「え？」

由花の返答よりも早く、かつ問答無用で陸の後頭部にマリーが呼び出した風の精霊が高密度の空気の塊となつて直撃する。

不意打ちを食らった陸の巨体が大きく揺れた。

「何、馬鹿な事言ってるのかしら？」

「純粹に科学者としての興味だ。性魔術関連は協力者が誰もいないてな」

「兄さん……」

「誰もそんなの協力する訳ないでしょ！」

「悪い悪い、遅れちまった」

マリーが喚きたてる中、ようやく到着した瑠璃香がその場に現れる。

「遅いわよ！ 何やってたのよ」

「ナニしてた」

露骨すぎる瑠璃香の返答に、全員が凍りつく。

「とにかく、出撃準備を。作戦まで1時間切ってるぞ」

「了解。あ、空これ頼む」

「はい？」

瑠璃香が手にしていた物を空へと渡す。

何気に受取った空の顔が、それを見た瞬間に青くなっていく。

「あ……うん……」

「潤さん！？」

「も、もう無理……」

それが、全身から生気がまったく感じられない潤の変わり果てた姿だった。

「誰か担架を！ 衰弱してます！」

「というか、萎びてるわ！」

「あつう……」

目の下がどす黒く変色してうわごとをつぶやいている潤に、空が慌てて応急処置の準備を始める。

「どうしたんですかその人!？」

「精気が根こそぎ奪われてます! ブドウ糖500ml!」

「……やったな」

「ん？」

対照的にやたらと血色のいい瑠璃香が、頬をかきながら緊急搬送されていく潤を見送る。

「ちと力補充したかったから、手近にいた奴でな。二桁もった奴はあいつが初めてだったぞ」

「ほ、本当にああなるんですね……」

由花が恐怖の視線を瑠璃香へと向けるが、陸は呆れ顔でそれを否定。

「瑠璃香の奴が特別なだけだ。何人が殺してるかもな」

「しばらくやってなかったから、加減間違えただけだ」

「あんた、その内に連載切られるわよ……」

「その時は同人誌とやらにでも手え出してみつか」

「いいから早く着替えてこい、ありったけの防護処置施さねばならんからな」

「へいへい……」

その場で着ていたライダースーツを脱ぎながら更衣室を兼ねるエレベーターへと向かう瑠璃香を、ある者は赤面し、ある者は呆れ顔で見送る。

「精気を補充してきたとなると、成功率は5%程上がるか……」  
「他に言う事ないの？」

淡々と準備を進める陸を横目でマリーが睨みつける。

「男食いつぶして悪魔払いじゃ、本末転倒よ？」

「せいぜい半月不能になるくらいだとか瑠璃香の奴は言ってたぞ。精神的にはそれ以上かもしれないが」

「戦闘能力だけは無意味に高いしね。素人がたった半年でバトルスタッフ入りなんて、前代未聞だったし」

「あとはもう少し周辺の被害を抑えられれば言う事ないんだがな」  
「……あんたが言う？」

普段から相手を倒すのに手段を選ばない瑠璃香と、状況いかんでは何をしでかさか分からない陸、どっちが危険かをマリーは脳内で比較したが、核兵器と細菌兵器の危険度比較をしているような気分になってきたのでそれを中止。

（徳治さんやオルセン神父がいてくれたらな……）

二年前に殉職した初代のバトルスタッフ・チーフや負傷で引退した瑠璃香の師匠の事を思いつつ、マリーが深くうなだれる。

そこへ、着替え終わった瑠璃香が特性のメットを手に現れる。

普段の戦闘用のバトルジャケツトとは違い、全身を覆う黒地にスレイプニルと同じ赤のラインが入っているライダースーツを身を包んだ瑠璃香は、肩を回したり指を動かしてみたりして着心地をチェック。

「ちょっと厚手じゃねえか？」

「最新型の衝撃吸収繊維と耐熱繊維を組み合わせたスーツだ。開発中の宇宙服の試作型がベースになっている。もつとも、時速600kmでコケたらどこまで耐えられるか分からんぞ」

「コケなきやいいだろが」

「ただ走るだけならともかく、競争して下手したら戦闘突入だ。オルセン神父に製作段階から防護陣刻んでもらったが、気休めにしかならん」

「ご大層なこった」

「何言ってるのよ、他に方法が無いからじゃない」

「無いわけじゃない。瑠璃香が失敗したら、上空衛星三基から同時にハイウェイを狙撃させる。さすがに3km同時に高出力レーザーで焼けば多少は効果あるだろう」

「あの、それって肝心のハイウェイの方は……………」

「大丈夫、周辺の人家に被害は出ないように細心の注意で出力計算した」

「…………他は吹っ飛ぶのね」

人的被害以外は完全に無視する陸の作戦に、マリーと由花が顔を青ざめさせる。

「そっちはそっちで面白そうだが、こっちの喧嘩が終わってからにしな」

「勝てそうか？」

「さあね」

自信の無さをあつさりと言い放ちつつ、瑠璃香はメットを被って首を動かし、重さを確かめる。

「勝てない時は勝たなくていい、だが死ぬな」

「そいつが一番難しい注文だな」

「じゃあ死なないで勝て、オレの命令はそれだけだ」

「了解」

「スレイプニルの最終調整は？」



「済んでいます！」

メカニックススタッフが、調整の済ませたスレイプニルをデュポンへと運び込もうとする。

「待ちな」

「はい？」

瑠璃香はそれを止め、スレイプニルに自ら跨るとエンジンを始動させる。

その場でアクセルを回して少し機関を空回しさせ、その音を聞く。

「OK、いい仕上がりだ」

ギヤを入れ、瑠璃香はスレイプニルを急発進。

「わっ！」

「きゃっ！」

そのまま急加速したスレイプニルが一瞬にして格納用スロープを駆け上がり、スライドさせながらデュポン格納庫へと収まる。

「とつとと行こうぜ」

「空、そっちはどうだ？」

『一応処置は終わりました。衰弱が激しいだけで後は問題ありません。すぐにそっちに行きます』

「レックス、ハイウェイの状態は？」

『封鎖は完了しました。封鎖区間内のIC、PAからも全人員が撤退済み』

「空が戻り次第、出撃する。作戦開始時刻は10時19分。作戦要

員は装備を最終確認」

『了解！』

「奴とは今日で縁を切るぞ、肝に銘じておけ」

「……モチロンだ」

スレイプニルに跨ったまま、瑠璃香は強く握りこんだ両拳を打ち合わせ、決意を決めていた………

## Dirty Angel

「やな空だな」

冬場特有の灰色の曇り空を見上げながら、瑠璃香は思わず呟く。  
木枯らしの吹き抜ける音に、スレイプニル・SHタイプのエンジン音が混じり、灰色の空に流れていく。

『作戦開始まで15分前』

『瑠璃香、スレイプニルの具合はいいか？』

「問題ねえぞ」

『制御系、メーター系、センサー系、動力系、異常なし。そろそろカウルを全閉しろ』

「了解」

手元で僅かな操作を行うと、自分の両脇に開いていた乗降スペースまでカウルが降り、瑠璃香を完全に風圧から守る。

『念のために言うておくが、むやみに開けようと思うなよ。風圧がどの位になるかは想像つくだろ』

「場合によるな、こんな物に隠れてケンカもねーだろ」

『言ってる』

上空のデュポンから送られる陸からの報告に適当に返ししながら、瑠璃香は眼前に広がる無人のハイウェイを見た。

そこにある無機質な路面が、これから始まる死闘の舞台になるのだという事に、瑠璃香は吐息。

『時間通り、間違いなくあれは出現します』

『だそうだ。作戦開始10分前と同時にスタート。出現と同時に作戦開始だ』

「了解。由花、相手がどう走るか分かるか？」

『す、すいません。モニターには表示されるはずなんですが、速くて私には全然……』

「だろうな。いいさは現場の判断だ」

スタートまでのカウントが響いてくる中、瑠璃香はメットの状態を確かめ、アクセルを握り込んでエンジンを吹かす。

「待つてろ……今追いついてやる」

呟きはスタートシグナルにかき消され、同時にスレプニル・SHタイプが急発進した。

『急に上げてくなよ。車体に負担がかかる』

「慣らしもやってないのかよ」

『出来るか!』

『ARES』の警告を聞き流しつつ、瑠璃香はアクセルを握りこみ、車体をますます加速させていく。

カウルとメット越しに響いていた風はいつしか 音 から 衝撃、そして 圧力 へと変化していく。

至近距離に感じるその圧力に耐えるように、瑠璃香は体をフロントカウルの後ろへと潜り込ませていく。

『現在時速、350……400……450……』

『フレーム各所への圧力、規定範囲内』

『作戦開始まで、あと5分』

複数の現状報告が通信から流れる中、瑠璃香は何も考えず、ただ速度を上げていく。

『時速、550……600!』

『来るぞ……』

レックスのカウンタを証明するように、周囲を流れる景色はただの乱雑な色へと変わり果て、空気は見えない壁となって押し寄せてくる超高速の世界で、瑠璃香は隣を見た。

いつの間にか自分の隣に並んでいる、おぼろげなフォルムの漆黒のバイクと、そのライダーを。

『作戦開始!』

並走する二台の漆黒のバイクが、陸の合図を号令としたかのようにその速度を増す。

『ろ、620、30……』

『抑えろ! 直線だけじゃないんだぞ!』

『向こうに言いな!』

カウルの向こうの圧力が破壊的に荒れ狂う中、バイクに張り付いた瑠璃香に加速度による圧力が襲う。

歯を食いしばり、ハンドルグリップを限界の握力で握り締め、瑠璃香はそれに耐える。

『右カーブ! 右27度に切らないと激突するぞ!』

『分かってる!』

本来ならば緩やかなカーブが、想定を遥かに上回る速度の前では

突如として出現する壁へと変貌する。

瑠璃香が僅かに速度を落とし始めた時、《スタンビーター》はまったく速度を落とさずカーブへと突っ込んでいく。

『ぶつかる！？』

「いや……………」

誰もが《スタンビーター》が壁に激突するかのように見えたが、まるで魔法のように《スタンビーター》はカーブを切り抜ける。

真後ろからそれを見ていた瑠璃香は、それがバランスを崩さない絶妙な体重制御による神業的コーナリングだという事に気付いていた。

「こつちも行くぞ！」

『バカ、傾きすぎ……』

焦った瑠璃香が、カーブを曲がるべく車体を傾けるが、それは限界状態で走っていたスレイプニル・SHタイプのバランスの限界を突破していた。

「！」

バランスが崩れる刹那の時、瑠璃香はいきなり左腕を無造作に真横へと突き出す。

今まで瑠璃香を風圧から守っていたカウルを自らの拳でぶち破り、荒れ狂う風の中にその腕が突き出される。

高速走行で透明な壁となっていた大気が、突き出された左腕を絡み取り、引き千切らんとする。

それを防がんと、ライダースーツに刻まれた防護陣が淡く光り、力を使い果たして焼き落ちる。

その圧力が、バランスを崩そうとしていた車体を引き、強引に力  
ーブを曲がったと同時に瑠璃香は腕を引っ込める。

それと同時に緊急用の自動修復が発動、バイクのボディから伸び  
た小型作業用アームが、カウルの穴へと修復液を噴霧。風圧に流さ  
れる寸前に凝固して穴を塞ぐ。

『なんちゅう無茶を……………』

「大丈夫、持ってくれた」

普通なら腕が吹き飛んでもおかしくない状態だが、瑠璃香の左腕  
はスーツの表面が裂けただけでなんとか保たれていた。

『今ので左袖の防護陣がほとんど消し飛びました！ 緊急用の修復  
液も残り有りません！』

『同じ手は使えないぞ』

「まだ右がある」

『おい！？』

常識無視の瑠璃香のコーナリングに、見ていたアドルスタッフ達  
は肝を冷やす。

瑠璃香は再度アクセルを吹かし、前に行く《スタンビーター》の  
追跡を続ける。

ゆつくりとだが、双方の距離が詰まっていく中、それは起こった。  
瑠璃香の視界の《スタンビーター》が、いきなり大きくなっていく。

（チキン（弱虫）・トラップ！）

相手が急ブレーキをかけたという事と、それが《彼女》の得意技  
の一つだったという事を思い出した瑠璃香が、グリップ脇の緊急ブ  
レーキを押す。

スレイプニル・SHタイプの後部カバーが左右へと展開し、風圧で減速をかけるエアブレーキとなって車体を減速させる。

両者の距離が一気に縮まっていき、激突寸前で《スタンビーター》が再度加速。

かろうじて激突を免れた瑠璃香も、後を追う。

「やっぱ上手いな、あいつはよ……………」

『大丈夫か？ もう直終着点だぞ？』

「追いついては見せるよ、あとは知った事じゃねえ」

どこか楽しげに呟きながら、『ARES』の心配をよそに瑠璃香は追跡を続ける。

『この速度だと、残る2分で作戦エリアを出ます！』

『瑠璃香下がれ、作戦の第二案を発動させる』

「うるせえ！ 余計な手出しするな！」

陸の命令を怒鳴り散らし、瑠璃香は追跡を続行。僅かずつだが、距離は縮まりつつあった。

『時速640……………650……………』

『止める！ 死ぬ気か！』

「あと少し、あと少しで追いつけるんだ……………」

己の技術の限界を駆使しながら、瑠璃香は加速を続ける。しかし、作戦の限界エリアは無常に迫ってきていた。

『エリア限界まで残る10km、約30秒！』

『瑠璃香』

「行けえっ！」



メーターはとつくにレッドゾーンを振り切れ、漆黒の閃光となったスレイプニル・SHタイプが《スタンビーター》の横へと並んでいく。

だが、残された距離はあまりに短かった。

『残る5 k m、4 k m、3 k m……』

『瑠璃香！』

残った距離がごく僅かになった時、瑠璃香は隣を見た。そして、呟く。

「走りじゃ、お前に勝てねえか。だけどな！」

次の瞬間、瑠璃香が起した行動を理解できた者はいなかった。

いきなり瑠璃香は車体を傾けながら、非常用のオートドライブボタンと脱出ボタンを押す。

高速用に着けられたカウルが全て爆音と共に吹き飛ばされ、スレイプニル本来の姿へと戻る。

そして瑠璃香の制御を離れたスレイプニルから、シートが勢いよく射出された。

本来ならクラッシュを避けるために真上へと飛ぶはずのシートは、傾けられた車体のせいで斜め上へと飛んだ。

その勢いで瑠璃香は横へ、《スタンビーター》の方へと飛び掛った。

『えっ……』

『おい……』

飛び掛った瑠璃香は、相手の首へと己の腕を巻きつけ、極めつつ

車体を傾ける。

制御を失った《スタンビーター》は、完全にバランスを崩し、高速で複雑なスピンドで火花を散らしつつ、ハイウェイを暴走していた。

「瑠璃香さん！？」

「瑠璃香！」

「空、マリー、すぐに降りろ。瑠璃香の生存確認は？」

「だ、大丈夫です！ スーツから生存情報が来ました！」

音速の半分の速度に飛び掛るという、自殺行為とすら言えない無謀な行動に、全員が顔を青くする。

そして、スピンドが終わった《スタンビーター》の映像がデュポンのモニターに映し出される。

そこには、派手にスピンドしながらも漆黒のバイクから離れないライダーと、その首を完全に極めた状態でライダーとバイクを下敷きにしてダメージを免れた瑠璃香の姿があった。

「鬼殺威流、《韋駄天狩り》。走りはお前だが、ケンカじゃあたいが上だったよな、フェイリン」

極めた腕を外さないまま、瑠璃香がライダーのメットに手をかける。

だが、その時突然バイク、ライダー共にその体が不気味な動きを見せる。

「！？ フェイリン……」

内側から膨れ上がった何かが、瑠璃香の腕を弾き飛ばす。

勢い余って弾かれた瑠璃香の前で、バイクとライダーの中から、金属の光沢を持った臓物のような物が飛び出し、バイクとライダーを覆って一つの物へとしていく。

それらが完全に一つとなっていくさなか、ライダーのメットが外れ、そこから瑠璃香にとって見覚えのある顔が現れた。

「フェイリンナー!!」

「る……り……」

紛れもない友の口から、瑠璃香の名が漏れたかのように思えた時には、その顔も埋まっていく。

そして、そこには完全な変貌を遂げた《スタンビーター》の姿が有った。

バイクだった部分は、機械とも臓物とも取れない物に覆われ、それでもなお二輪を残した奇怪な下半身となり、ライダーだった部分はまるで出来そこないのヒーロー人形のような金属質の上半身となる。

身長は倍近く伸び、金属のマスクのような顔から、唯一生身に見える単眼が瑠璃香を見た。

「こいつが、フェイリンを……」

『下がれ瑠璃香！ 戦闘は空とマリーに任せて…』

「手え出すんじゃないねえ！ こいつはあたいが片をつけると言ったはずだ！」

『無理だ、その体じゃ!』

瑠璃香の隣に、こちらも結局スピンしたらしいボロボロのスレイプルが停まる。

「『ARES』！ あたいの得物を!」

『……分かったよ』

スレイプニルの碎けたサイドカウルが横にスライドし、そこから瑠璃香の武器が飛び出す。

『無理をするな。そいつは強いぞ』

「んな事、分かってんだよ！」

瑠璃香は聖書を手に取ると、それを上へと投げる。

放り上げられた聖書が、頭上へと落ちてきた時、突き上げられた瑠璃香の拳が、聖書の背表紙を砕く。

装丁が外れた聖書が、無数の紙片となって舞い散り、その紙片がまるで見えないレールにでも導かれるように虚空を舞い、無数の紙片の帯が瑠璃香と《スタンビーター》の周囲を覆い、ドーム型の結界を形成していく。

「《聖書結界》！」

ガルーダで降りようとしていた空が、その外界を完全に遮断する強力な結界に絶句する。

『瑠璃香の奴、本気で自分だけで戦うつもりか………』

「どうするの！？ あれは簡単には解けないわよ」

ユニコーンで地面には降下していたマリィが、中の様子すら分からない状態に戸惑うが、陸はいたって落ち着いたままだった。

『二人とも、そこで待機。何かあったら即座に突入だ』

「兄さん………」

『片をつけると言ったのは瑠璃香自身だ。自分で言った事に責任取

らないような軟弱な奴じゃない』

「それはそうだけど……………」

『サポート体制を万全に整えておけ。レックス、念のために結界地点を上空衛星からポイントしておけ』

『瑠璃香さんごと撃つんですか！？』

『最悪は、な』

「さあ、始めようか」

聖書の紙片で形作られた結界の中で、齒を剥くような笑みを浮かべた瑠璃香が両拳を鳴らす。

「主よ、我に邪悪なる魂戒めんための力与えん事を」

宣言を述べつつ、胸の前で十字を切る。

エクソシズム（悪魔払い）を行う事を神へと宣言し、その助力を仰ぐ言葉と共に、瑠璃香は《スタンビーター》と対峙する。

《スタンビーター》は単眼を複雑に動かし瑠璃香を見ると、下半身からエンジン音を響かせる。

（来るっ！）

直感のままに、瑠璃香は横へと跳ぶ。

その足元を、一瞬にして高加速した《スタンビーター》が衝撃波と共に突き抜けた。

「ちっ！」

かすめただけにも関わらず、瑠璃香の靴が衝撃だけで裂け、露出

した足から僅かに血が宙へと舞った。

《スタンビーター》は結界ぎりぎりまで体をスピンさせるように旋回させ、瑠璃香を再度狙う。

「アーメン！」

飛び退きざま、スレイプニルから退魔用拳銃G・ホルグを抜いた瑠璃香が、路面へと転がりながら、トリガーを引いてA・ブレット（退魔用純銀製弾頭）を連射。

放たれた弾丸は、《スタンビーター》の前輪に突き刺さり、それをバーストさせる。

バランスを失った《スタンビーター》が転倒すると、瑠璃香は即座に聖句を詠唱。

「我が守護天使ハナエルよ、汝の御手に掲げし聖銃の雷火、我が前に放たん事を！」

虚空に出現したプラズマの塊、瑠璃香の得意とする《ハナエルの銃火》が《スタンビーター》へと放たれる。

だが、バーストした前輪を《スタンビーター》のボディから溢れるように流れた金属質の肉に覆われていき、その肉で即座に補修され、《ハナエルの銃火》が炸裂する寸前にそれを回転させて攻撃を逃れた。

「ちっ！」

『来るぞ！』

転倒状態からまるで逆再生のように何の補助もなしに起き上がった《スタンビーター》が、瑠璃香へと迫る。

「天空に在りし大天使……」

詠唱も間に合わず、猛加速した《スタンビーター》が瑠璃香へと激突する。

『瑠璃香！』

「……神の座の右に在なす東の大天使ミカエルよ、その御手に掲げし御剣を我に貸し与えよ！」

弾き飛ばされる前に《スタンビーター》にしがみ付いた瑠璃香が、激突のダメージを物ともしないように聖句の詠唱を続行。

本来は剣などに宿らせる《ミカエルの剣》の術を、自らの左手に宿らせ、半透明の剣の幻影をまとった左手を《スタンビーター》の胴体へと突き刺す。

血臭のするオイルともオイル臭のする血とも分らない体液を撒き散らし、まるで絶叫のように狂ったエンジン音を響かせる《スタンビーター》が、デタラメなジグザグ走行で瑠璃香を振り解こうとする。

「神と子と聖霊の御名の下、咎在りし者は座して許しを請わん！己が罪を認めぬ者、煉獄の炎にて責め苦を負わせん！」

聖句の詠唱を続け、瑠璃香が更に左手を突き刺すが、《スタンビーター》は突然前輪を持ち上げる。

（ヤバい！）

相手から離れる間もなく、瑠璃香の体が相手の前輪ごと弧を描き、一回転して《スタンビーター》の質量ごと地面へと叩きつけられる。

「がはっ！」

突き抜けた衝撃が、瑠璃香の背中から内臓へと響き渡る。

口からは苦悶と共に血が吐き出された。

「はっ、リープターンかよ。あいつの得意技だったな……………」

口元の血をぬぐいつつ、瑠璃香がゆつくりと立ち上がる。

瑠璃香を叩きつけた後に即座に離れていた《スタンビーター》が、再度攻撃を加えるべく、瑠璃香へと迫る。

「けどよ……………」

どこか虚ろな瞳で、瑠璃香は迫り来る《スタンビーター》を見据える。

激突する寸前、瑠璃香は僅かに体をずらし、相手の攻撃を紙一重でかわす。

通り過ぎた衝撃だけで体が揺さぶられるが、瑠璃香はむしろ笑みさえ浮かべている。

ドリフトターンで体を反転させて再度突撃してくる《スタンビーター》に、瑠璃香は握ったままだったG・ホルグを向ける。

《スタンビーター》は射線から逃れるべく、後輪をドリフトさせながら車体を倒し、そのままの速度で瑠璃香の足を狙う。

だが、そこに放たれた弾丸がまるでそうなる事を読んでいたかのように全弾が《スタンビーター》の体に突き刺さった。

「遅えな、てめえはよ……………」

横へと跳んで弾丸が突き刺さりながらも突っ込んできた《スタンビーター》をかわし、なおも瑠璃香は弾丸を叩き込む。



マガジンの残弾全てを撃ち込まれた《スタンビーター》は、弾痕から溢れ出した赤黒く濁った体液で全身を染め上げ、一部高熱化している所があるのか、体液の一部を焦がして異臭を漂わせる。

「戦い方はあいつにそっくりだ。けど。あいつはそんなにトロくなかったぜ……………」

全身にダメージが残る中、瑠璃香はG・ホルグを握ったまま右手で十字を切り、左手で相手をまねくように威嚇する。

「聖なるかな！ 聖なるかな！ 聖なるかな！ 樂園守りしケルビムよ！ その…」

聖句の詠唱を続ける瑠璃香に向かい、《スタンビーター》が体液を撒き散らしながら突撃、瑠璃香との距離が狭まった瞬間、突然下半身から足とも思える肉柱がせり出し、《スタンビーター》の体を上へと飛び上がらせる。

「御手に掲げし剣の炎を持ちて、邪悪なる者から我を守らん事を！  
アーメン！」

上空から降ってくる巨体に、瑠璃香は焦らず詠唱を終えると、左手を地面へと叩きつける。

そこを基点として、噴き出した業火が瑠璃香の周囲を覆い、《スタンビーター》を焦がしながら弾き飛ばす。

「見え見えの手にかかってやがる。ケンカのノウハウも分からねえってか？」

業火をまともに喰らい、全身を焦がした《スタンビーター》が離

れるのに、瑠璃香は素早くマガジンを交換したG・ホルグを向ける。

「熱いだろ、冷ましてやるぜ！」

瑠璃香はG・ホルグを連射、装填されていたCブレット（冷凍ガス弾）が相手に命中すると内包されていた冷凍ガスを撒き散らし、《スタンビーター》の体を凍らせていく。

「天空に在りし神の座の左に在なす北の大天使ガブリエルよ！ 汝が司りし贖罪の源流、我が前に解き放たん事を！」

瑠璃香が指先で虚空に描いた五芒星から、光り輝く水流が噴き出し、《スタンビーター》へと押し寄せる。

浄化の力が込められた水流が、撃ち込まれていたC・ブレットの冷凍ガスと相まって《スタンビーター》の体を凍りつかせていく。凍り付いていく体をどうかしようと《スタンビーター》がエンジン音を轟かせて体を震わせるが、その体は瞬く間に氷へと覆われていった。

「返してもらっぜ、あたいの仲間をよ！」

G・ホルグをホルスターに戻すと、瑠璃香は痛む体を見捨てず、呼吸を整え精神を深く集中させ、聖句を唱え始める。

「主よ！ 汝全ての罪を背負いし時の戒め、我に現し聖なる血潮流さん事を！」

詠唱と共に、瑠璃香は両手を左右へと広げ、両足を合わせて体を十字の型に。

両手足に痛みと共にぬめりを帯びた血が流れ出し、キリストが処

刑された時に帯びたとされる傷　聖痕が浮かびあがる。

聖痕が形を成すのに合わせ、瑠璃香の全身が淡い光に包まれる。

「ハレルヤ！」

自分を包み込み力を感じとった瑠璃香は拳を強く握り締め、《スタンビーター》へと襲い掛かる。

だが、拳が触れる寸前、《スタンビーター》の体が突然破裂した。

「な、につ！？」

破裂の直後、炎と黒煙が続けて吹き付けてくる。

眼前で腕をかざしてそれらを防ぎながら、瑠璃香は後ろへと跳んで再度距離を開け、相手を観察した。

「てめえ、ガソリンに着火して解かしやがったのか……………」

漂う異臭に、相手の脱出手段を知った瑠璃香は思わず舌打ち。

無論、《スタンビーター》自身も無事な訳がなく、体表のほとんどは焦げ、血と油の焦げた異臭が相まって漂っている。

とめどなく流れる赤黒い体液が、湯気を立てて焦げた体を覆っていた。

「思ってたより、根性あるじゃねえか……………」

切れてきていた呼吸を整えながら、瑠璃香が《スタンビーター》に歯を剥くような笑みを送る。

（術を連発しすぎた……………こっちもやばいな）

全身に疲労感と激痛を覚えながら、瑠璃香は右足を前に、左足を後ろに引き、胸の前で肘から曲げた両腕を直角に交差させ、構える。

「ケリ、つけようか……………」

答えるように、《スタンビーター》がエンジン音を大きく轟かせる。

「行くぜ！ 神と子と聖霊の御名において！」

瑠璃香が駆け出し、《スタンビーター》も疾走する。

瞬時にして高速の粹に達して《スタンビーター》が瑠璃香へと突撃する。

だが、瑠璃香は激突する手前で上へと跳ぶ。

交差の瞬間、瑠璃香は相手の勢いをそのまま、相手の上半身の胸元にカウンターで膝を突き刺す。

速度差で膝が深くめり込むが、違いすぎる体格と速度はその程度で止まらず、瑠璃香の体を上へと弾き飛ばす。

「おおおお！！！」

体が弾き飛ばされる中、瑠璃香の両手が《スタンビーター》の首を掴む。

「土は土に！」

弾き飛ばされる体を握力と腕力で強引に固定し、瑠璃香は逆さのような状態で《スタンビーター》の頭部にちょうど茨の冠の跡のように聖痕が浮かび上がっている頭を頭突きとして相手の頭頂へと叩き込む。

「チリはチリに！」

予想外の攻撃に《スタンビーター》の体が大きく揺れる中、瑠璃香はさらに聖句と共に頭突きを叩き込む。

強力な頭突きの連発に、《スタンビーター》はバランスを崩し、転倒していく。

「闇は闇へと帰れ！」

巻き込まれて転倒していく中、振り上げた瑠璃香の左拳が、《スタンビーター》の上半身の横腹へと突き刺さる。

転倒し、スピンする《スタンビーター》に、瑠璃香は片手でしがみついて離れようとしない。

スピンの終わり、動きが止まった所で、瑠璃香は素早く起き上がり、全身全霊の力を込めて右拳を振り上げる。

「アーメン!!」

淡い光がこもった拳が、《スタンビーター》へと深々と突き刺さる。

拳が突き刺さった所から、眩い光が溢れ出す。

溢れ出した光が結界を貫き、辺りを閃光で染め上げる。

「これは……」

「瑠璃香！」

光が晴れていく中、待機していた空とマリーが瑠璃香の元へと駆け寄る。

拳を振り下ろしたままの体勢で、瑠璃香は足元にある灰の塊を見

た。

それは急激的に形を失い、崩れて風に流されていく。

「……フェイリン……」

灰が流されていく中、その中から何かが出てきた事に気付いた瑠璃香は、それを拾い上げる。

それはフェイスが割れ、傷だらけのヘルメットだった。

「やっと顔見せやがったな、こいつ……」

ヘルメットを手に瑠璃香は小さく呟く。

曇り空の切れ目から覗いた陽光が、傷だらけのヘルメットを照らし出していた……

「ふう……」

窓越しの曇り空の中を、吹き抜ける木枯らしが沈みがちな気分を更に鬱にしていくのを三谷・ユウリンは感じていた。

天気予報は初雪の可能性を提示していたが、それよりもこの空があの時と同じだった。

二年前の手術の日、来るはずの姉が来ないまま手術をした。

手術は成功したが、一番その事を伝えたかった姉には、二度と会う事はなかった。

「つつ……」

気分が沈みすぎたか、心臓に軽い痛みが走る。

医者からは心因性の物で問題はない、と言われていたが、完治させる方法が見つからないのも事実だった。

どこかいたたまれなくなつて、カーテンを閉めようとした時だった。

一台のバイクが、エンジン音を響かせてこちらへと向かつてくる。

「姉さん？」

それが、姉が会いに来てくれた時と同じ状況だった事に、ユウリンは慌てて玄関へと走り出す。

玄関を勢いをつけて開けると、バイクが玄関先で止まるのは同時だった。

（違う……）

ヘルメットを取った下から現れたのが、姉ではない事に落胆したユウリンに、そのバイクのライダーが優しく微笑みかける。

「あんたか、フェイリンの妹は」

「姉さんを知ってるんですか？」

「知ってるよ、ダチだったから」

「え……と、ひよつとして瑠璃香さんですか？」

そのライダーが、姉が聞かせてくれた友人の特徴にそっくりだったのをユウリンは思い出す。

「お、あたいの事なんか聞いてたのか？」

「黙っていればワイルドな長髪美人だけど、その実チームで一番凶暴で淫乱な……」

「……………で、続きは？」

にこやかに殺気を発しつつある瑠璃香に、ユウリンは続きを一部省略、姉が病院に見舞いに来てくれた時に話してくれた一番重要な事を口に出す。

「頼りに、なる奴だつて……………」

「……………そうか、あいつはあたいをそんな風に言つてたのか……………」

顔を伏せ、視線を合わさないようにした瑠璃香は口元だけで微笑。

「だったら、あたいはどうしようもない嘘つきだな。あいつの頼りに、なれなかった……………」

「え……………」

瑠璃香はバイクの後ろに結わえておいた荷物を解くと、その中から出てきた物をユウリンへと手渡す。

「これ、姉さんのヘルメット！」

「ハイウェイの下に落ちてたのが、最近見つかったらしい。焦げたバイクと一緒にな」

「じゃ、じゃあ姉さんは！」

「……………骨もほとんど残つてなかった。ちょうど影の位置で、今まで発見されなかったらしい……………」

「そんな……………姉さん……………」

「じきに警察から正式な話がくるはずだけど、先に連絡だけでも、と思つて……………」

ヘルメットを抱え、涙を流すユウリンを瑠璃香は黙って見てたが、やがてバイクの後ろにあったもう一つの荷物を取り出す。



「生憎と、こんな手土産しか用意出来なくってな。ついでにもらってくれるか？」

「……これ！」

それは、一冊のスケッチブックだった。

そのスケッチブックの何ページにも渡って、生き生きとしたフェイリン・春都の姿がスケッチされていた。

涙をぬぐいながら、そのページに見入るユウリンの顔に懐かしむような笑顔が浮かぶ。

「思い出しながらだからな、ちょっと美化してっかも」

「瑠璃香さんが描いたんですか？」

「一応、本職だからな。でも、一枚完成してねえんだ。手伝ってもらえるか？」

「あの、何をすれば？」

「そうだな……あそこで座っててもらえるか？ そんなにはかからないと思うから」

「？」

縁側にユウリンが座ると、瑠璃香は鉛筆を取り出し、スケッチブックの最後のページを開くとそこにスケッチを始める。

幾度となくユウリンの方を見ながら、瑠璃香の握る鉛筆が紙の上に何かを描いていく。

無言のまま、しばらくその作業を続けた瑠璃香は、やがて会心の笑みで作業を終える。

「おし、完成」

スケッチブックを手渡されたユウリンは、そこに描かれているの

を見て言葉を失う。

それは、バイクに跨っている姉とその隣に立つ自分が肩を組んで楽しそうに笑っている絵だった。

「いいんですか？ これ、もらっちゃって……………」

「何言ってるんだよ、そのために描いたんだから遠慮なくもらっときな。プレミアはつかねえかもしれねえけどよ」

「あ、ありがとうございます……………」

「じゃ、あたいは帰るからよ。体、大事にしな。あいつも天国で前の事を心配するからな」

「は、はい！」

バイクに跨った瑠璃香は、一度だけ背後を振り返る。

そこに、スケッチブックを持って微笑む少女と、そのそばに立つ優しい顔をした親友が見えたが何も言わずにその場を走り去った……

……

「る〜り〜か〜さ〜ん〜」

「よ、潤平体大丈夫か？」

教会に戻った瑠璃香に、顔色がまだ青い担当編集が地獄の底から響くような声で瑠璃香を出迎える。

「し〜め〜き〜り〜、今日ですよ……………？」

「あ……………」

幽鬼のような表情で肩を掴む潤に、瑠璃香の表情が凍りつく。

「あのさ、諸事情によりせめて明後日くらいに……………」  
「もう限界なんですけど?」

奇怪な角度で首を傾げながらの宣言に、瑠璃香の頬を冷や汗が流れ出す。

「今度落としたら、原稿料減らすって編集長言ってますよ?」

「待ってくれ! そんな事されたら、おっさんに怒られるし、陸の奴が並行して危険手当減俸するって言ってやがるんだ!」

「後、5時間ですよ」

「だあああああー!!」

瑠璃香の絶叫が、周囲に木霊する。

まるでせかすかのように、空から初雪が、静かに舞い始めていた

……………

同日夜半 アドル本部副総帥室

『マスター、シュミレート結果出ました』

「メインディスプレイに出してくれ」

『了解』

『LINA』の操作で部屋の壁に吊るされたディスプレイにシュミレーション結果が表示される。

それを見た室内にいた数人が、誰もが信じられないような声を上げる。

「兄さん、これは……」

「にわかには信じられないわね……」

空とマリーの言葉に誰もが同意するかの用に、嘆息する。

「恐らく間違いないだろう。現場の検証結果を詳細に分析して、サイエンス・アビリティ両スタッフの出した結論だ」

陸の静かな断言に、空が片手で顔を覆う。

「酷い話だな、瑠璃香のダチは昔のとばかりで死んだのかよ」

メカニックススタッフチーフの榊原の言葉が示す通り、ディスプレイに映し出された結果は、《スタンピーター》を253年前の呪法によって発生した物と結論付けた物だった。

「当時の何者が行った呪かは分からない。恐らくは当時も完全に制御できた物ではなかったんだろう」

「犬神か何かの召喚系呪法を馬に応じたもの……でしょうね」

陸の説明に、画面を見て顔を青くしていた敬一が捕捉をする。

だが、誰もが納得した表情は出来なかった。

「当時の文献にも、三谷 真衛門を恨みに思う者がいたかは特定できませんでした」

「関係者の魂魄が活性化しないかと、言われた通りに作戦中、恐山の桐生さんに口寄せしてもらったっすけど、そっちもダメでした」

レックスが手元のコンソールを操作し、メインディスプレイに当

時の文献を幾つか表示させる。

並行して、若いイタコと敬一が二人がかりで交霊の儀式を行っている映像が倍速で表示されていた。

「皮肉な事だが、一番つてのは怨まれるもんだぜ。なんであつてもな」

榊原の言葉には、深い苦渋が満ちていた。

「この事、瑠璃香には言うの？」

マリーの言葉に陸は首を横に降る。

「今は言わない方が良さだろう。いつか落ち着いてから話をする」

デスクの上のシガレットケースから、タバコを一本取り出した陸は、ゆっくりと火をつけると紫煙を天井に向けて吐き出す。

「でもなんでですか？ 当時の呪だったら、呪をかけられた当人も、かけた本人も死んでいるってのに、何でそんな物が今ごろ！」

敬一の問いに答えられる者はいなかった。

室内に思い沈黙が満ちる。

「どちらも死んでいるからじゃよ」

不意に今までしなかった声が、入り口から掛かってきた。

『遣雲和尚！』

全員が一斉に声をかけた当人へと向き直る。

そこには先程までいなかった小柄な僧衣の温厚そうな老人が立っていた。

「いつお戻りに？」

陸の問いに遣雲和尚は答えずに、部屋の中へと入ってきてメインディスプレイに映された情報を読みとっていく。

「昔にの、これと似た事があった。あの時は50年前の呪いじゃったがな。犬神に失敗した者がとんでもない化け物を産み出した」

目を細め、何かを思い出すかのような遣雲和尚の言葉に誰もが重く口を閉ざす。

「偶然にも条件が似通った時ぐらいじゃ、こんな事が起きるのわの」

陸の手にしたタバコが、長くなった灰を下にある灰皿へと落す。それに気付いた陸がタバコを灰皿に押し付けて消し捨てる。

「気に病む事はない。こんな事あとはいりやせんって！ 瑠璃香坊にはワシが慰めておくからの。さ、解散じゃ、辛気臭い話はこの」

遣雲和尚の言葉に納得したのか、榊原が頷きだけ残して、部屋を出る。他の者もそれにならって退室していく。

「遣雲和尚、瑠璃香さんの事をお願いします」

最後に部屋を出た、空の言葉に遣雲和尚は手だけ降って答える。

部屋には陸と遣雲和尚だけが残された。

「言わなかったんじゃない、もう一つの要因を」

陸に背を向けた遣雲和尚が、呟く。

「言えないでしょう。不安を煽るだけになる」

陸がデスクのコンソールを操作すると、メインディスプレイに、まったく違う情報が表示される。

「近年の日本各地のオーラレベルと超常事件をグラフ化した物です」

画面には、右に行くと急激的にマイナスに落ち込んだグラフと、それと反比例で急激的に増加していくグラフだった。

「また、下がったの」

「ええ、おそらく今回の件と関係なくは無いでしょう」

メインディスプレイの表示を消すと、ディスプレイはそのまま天  
上へと収納されていた。

「この世界そのものが、急速にマイナスに向かっている。M、Sも、  
今回のような呪的な存在も今後、さらに活発化する事でしょう」

陸の言葉を受けた遣雲和尚が、虚空を睨むかの用に見上げる。

「させぬよ、このADDLがある限りはな」  
「その通りです」

陸はデスクの引き出しから、一枚の写真立てを取り出すと、それに向かって静かな視線を注ぐ。

「未来を、我々は作らなければ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0254b/>

---

オーガゲートキーパズ CASE 2 RACING

2010年11月27日17時09分発行